

デジモンフアイズ ウォーズ

鉄壁拡散

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドライブの一夏が合流した後ダンとまゐはファイズの変身者がいるデジモンの世界に到着した。

目次

ジェネラルとの出会い	1
タイキの仲間全員集合！	15
デジタルワールドの初陣	29
アクセルフォーム見参	42
ファイズVSダークナイトモン	68
過保護なネネ	76
真つ赤に染まれ！ ブラスターフォーム	87
！	87
ネネの告白！ 結ばれた想い	100
新たなライダー！ カイザとデルタ！	111
未来を掴め！ 最終決戦！！	126

束の間のショッピング！ 小さな女子
会！！

ジエネラルとの出会い

馬神弾と紫乃宮まゐはファイズの変身者がいる世界に到着した。

ダン「ここがファイズがいる世界か。」

まゐ「早く会えるといいね。」

ダン「それにしてもデジモンか。本当にいたなんて信じられないな。」

まゐ「うん、私も。ゲームか漫画の話かと思ってた。」

そう彼らが来たこの世界はデジタルモンスター通称デジモンがいるのだ。

ダン「じゃあ行こうか。」

まゐ「ええ。」

ダンとまゐはこのデジモンの世界にいるファイズの変身者を探しに出発するのだ
た。

ところ変わってとある学校

??? 「クオーツモンとの戦いからもう3年か。早いな。」

この男は工藤タイキ、デジモンのチームクロスハートのジエネラルである。口癖は

ほっとけない。かつてデジタルワールドで活躍して、世界を闇に染めようとしたバグラモンを倒した。そしてその2年後地球をデジタル化しようとしてデジクオーツを生み出したクオーツモンとの戦いを終え、残ったはぐれデジモン達を後輩の明石タギルを始めとしたデジモンハンター達とハントしながら3年の月日が過ぎて高校2年となっていた。タイキ「さて早くタギル達の所に行かないとな。」

この時のタイキは知らなかった。新たな戦いが始まるということ。

タギル「あ、タイキさーん！」

タイキ「待ったか？」

ユウ「いえ、僕達も今来た所です。」

この2人は明石タギルと天野ユウ。タイキの後輩で共に世界を救った仲間である。タイキとは同じ高校である。

タイキ「それにしても最近デジモンは現れないな。」

ユウ「もう殆どハントしてしまったのかもしれないね。」

タギル「ちえ、つまんねえな。」

シャウトモン「そう言うなって。」

ダメモン「最近ずっとこれネ。」

ガムドラモン「俺っちもなんか暴れ足りないぜ。」

彼らはシャウトモン、ダメモン、ガムドラモン。シャウトモンはタイキのパートナーでデジタルワールドのキングである。ダメモンはかつてはバグラ軍のリーダーバグラモンの弟・ダークナイトモンの部下で利用されていたユウと一緒に敵として戦ったデジモン。今ではユウのパートナーデジモン。ガムドラモンはタギルのパートナーデジモンでデジクオーツ事件を引き起こしたクオーツモンをタギルと共にハントした。

タイキ「クオーツモンとの戦いからもう3年。あの時はバグラモンの時より大変だったな。」

ユウ「はい。」

???「ゲコーー!」

タイキ・タギル・ユウ「!」

3人が思い出に慕っていると丁髷をつけたカエル型デジモンが現れた。

タイキ「デジモン!」

シャウトモン「あれはトノサマガEMON!」

タギル「よーし! 久しぶりのハントだぜ! 行くぞ、ガムドラモン!」

ガムドラモン「おうよ!」

ユウ「あ、タギル!」

タギルはトノサマゲコモンの元に走り出した。その後をタイキとユウが追い掛ける。その様子を建物の屋上である2人が見ていた。そう、ダンとまるである。

ダン「あれがデジモンか。」

まる「データの存在とは思えない生物ね。」

2人は暫く観察することにした。

タギル、タイキ、ユウはそれぞれのパートナーデジモンに進化させたり(超進化)、デジモン同士を合体させり(デジクロス)、複数のデジモンを入れたりできるアイテムクロスローダーをかざす。

タギル「ガムドラモン、超進化！」

タイキ「シャウトモン、超進化！」

ユウ「ダメモン、超進化！」

アレスタードラモン「超進化、アレスタードラモン！」

オメガシャウトモン「超進化、オメガシャウトモン！」

ツワーモン「超進化、ツワーモン！」

屋上

ダン「この世界ではあんな進化の仕方なのか。」

まる「お手並み拝見ね。」

トノサマゲコモン「コブシトーン！」

トノサマゲコモンはコブシトーンで攻撃したがアレスタードラモン達は難なく躲す。

オメガシャウトモン「そんな音痴な歌かき消してやるぜ！」

タイキ「行け！ オメガシャウトモン！」

オメガシャウトモン「ハードロックダマシー！」

ユウ「ツワーモン！」

ツワーモン「マンティスダンス！」

トノサマゲコモン「ゲコー!?!」

タギル「止めだ！ アレスタードラモン！」

アレスタードラモン「プリズムギャレット！」

トノサマゲコモン「やられたゲコー!?!」

3体の攻撃を受けたトノサマゲコモンの周りに輪っかが現れ包み込み、トノサマゲコモンが消えた。そしてタギルのクロスローダーの画面にトノサマゲコモンが現れトノサマゲコモンは捕獲された。

タギル「デジモン捕獲完了！」

タイキ「あっさり終わったな。」

男性「うわー！」

ユウ「!? 今の悲鳴は？」

タイキ「行ってみよう！」

タギル「あ、タイキさん待ってくださいーい！」

タイキとタギルとユウは悲鳴があつた場所に向かった。

屋上

ダン「奴らが動き出したのか？」

まゐ「私達も行きましょう！」

ダン「そうだな！」

ダンとまゐも現場に向かった。

3人が現場に着くと1人の男性が灰色の怪人に襲われていた。

タギル「何だありゃ!？」

灰色の怪人「死ね！」

男性「うわー！」

男性は灰となつてしまった。

タイキ「人が・・・」

ユウ「・・・灰になつた。」

灰色の怪人「まだいたのか。ここで消えてもらう。」

灰色の怪人はタイキ達に襲い掛かろうとした。だが、

ダン・まる「ハッ！」

灰色の怪人「どわあ！」

ダン・まる「ハッ！」

灰色の怪人「ぐわあ!?!」

タイキ・タギル・ユウ「え!?!」

ダンとまるが現れ、灰色の怪人を蹴り飛ばした。

ユウ「蹴り飛ばした!?!」

タギル「スゲー！」

シャウトモン「何だあいつら？」

ダン「そこまでだ、オルフェノク。」

ガブドラモン「オルフェノク？」

まる「一度死んだ人間が蘇つて怪物になつた姿よ。」

タギル「死んだ人間が!？」

ステイングフィツシユオルフェノク「その通りだ。だが知っていないながら俺に齒向かうとは余程の命知らずだな。何者だ？」

ダン「教えてやろう。まゐ行くぞ！」

まゐ「オツケー！」

ダンとまゐがデツキを前に突き出すとVバックルが装着された。

ダン・まゐ「変身！」

ダンとまゐはVバックルにデツキを装填した。

タイキ・タギル・ユウ「!？」

ダンとまゐは龍騎とフアムに変身した。

龍騎「つしやあ！」

フアム「ふっ！」

ガムドラモン「へ、変身した!？」

タギル「つーかあれって・・・。」

ステイングフィツシユオルフェノク「仮面ライダーだと!？」

龍騎「そう、俺は仮面ライダー龍騎。」

フアム「私は仮面ライダーフアム。」

龍騎「お前達ここは俺達に任せろ。」

ファム「今のうちに逃げて。」

ステイングフィッシュユオルフェノク「おのれ！」

龍騎とファムはステイングフィッシュユオルフェノクと戦闘を開始し、別の場所に移動した。

ユウ「タイキさん。」

タイキ「ああ。遂にこの時が来たんだな。」

タイキはガラケーの携帯のようなものを取り出した。

タイキ「行って来る！」

ユウ「はい、後は任せてください！」

タイキは戦いの場に走り出した。

一方龍騎とファムは徐々にステイングフィッシュユオルフェノクを追い詰めていく。

龍騎「降参したらどうだ？」

ファム「貴方に勝ち目はないわ。」

ステイングフィッシュユオルフェノク「黙れー！ー！」

ステイングフィッシュユオルフェノクは憤りを感じ怒りのままに突っ込んできた。そ

の時！

ステイングフィツシユオルフェノク「ウワア！」

謎のロボットが現れてステイングフィツシユオルフェノクを突き飛ばした。

フアム「ロボット？」

龍騎「こいつは確か、オートバジンか!？」

タイキ「その通り、俺の仲間だ。」

タイキがオートバジンの隣に現れた。

フアム「貴方、どうして!？」

ステイングフィツシユオルフェノク「何故戻ってきた？」

タイキ「このままじゃほっとけないからな。見てられなかった。」

そう言つてタイキはベルトのようなものを装着した。

龍騎「ファイズギア!？」

フアム「まさか!？」

タイキ「そういうこと。」

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキ「俺は戦う・・・みんなの自由のために人間として、仮面ライダーとして・・・変身！」

『Complete!』

タイキはファイズフオンを頭上に翳しながら構え、ファイズドライバーに突き立てて倒した。するとファイズドライバーからフォトンストリームが放出しタイキはそれに包まれ紅の閃光を発生し、閃光が消えると仮面ライダーファイズがいた。

ステイングフィッシュオルフェノク「ファイズだと!？」

龍騎「お前がファイズだったのか!？」

ファイズ「そういうこと。俺も力を貸すよ！」

フアム「ありがとう！」

ファイズ「はっ！」

オートバジンから専用剣「ファイズエッジ」を抜刀した。

ステイングフィッシュオルフェノク「このまま終わってたまるか!？」

ファイズ「ハッ！」

ステイングフィッシュオルフェノク「ノワア！」

ファイズはファイズエッジで斬りつける。

フアム「私もいるよ！」

ブランバイザーへSWORD VENT!<

ファム「ハッ!」

ステイングフィツシユオルフェノク「ぐっ!」

ファムもウイングスラツシヤーで斬りつける。

龍騎「俺も忘れるなよ。」

ドラグバイザーへSTRIKE VENT!<

龍騎「ハアッ!」

ステイングフィツシユオルフェノク「ぐわあ!」

龍騎はドラグクローでダメージを与える。

龍騎「止めは任せる。」

ファム「お願いね。」

ファイズ「分かった。」

ファイズはファイズフォンに着いているミツシヨンメモリーを外し、ファイズドライバアの右部にセットしてあるデジタルトーチライト・ファイズポインターにセットしてキックモードにし、

『Ready!』

ファイズポインターを右足にセットした。

龍騎「自己紹介がまだだったな。」

フアム「そうね。」

龍騎とフアムは変身を解除した。

ダン「俺は馬神弾。ダンって呼んでくれ。」

まる「私は紫乃宮まる。私もまるって呼んで。貴方は？」

フアイズも変身を解除した。

タイキ「俺はタイキ。工藤タイキだ。」

これがクロスハートのジェネラル・工藤タイキとの最初の出会いだった。

タイキの仲間全員集合！

ステイングフィッシュユオルフェノクを倒したタイキ達はタギルとユウがいる場所に向かっていた。

ユウ「あ、戻ってきた。」

タギル「タイキさーん！」

タイキ「タギル！ ユウ！」

無事に合流した。

タギル「倒したんですねさっきの奴！」

タイキ「ああ。」

ユウはタイキの後ろにダンとまゐがいることに気づいた。

ユウ「あ、さっきの人達。」

ダン「初めましてだな。俺は仮面ライダー龍騎の馬神弾。気軽にダンって呼んでくれ。」

まゐ「私は仮面ライダーファムの紫乃宮まゐよ。」

ユウ「僕はタイキさんの後輩の天野ユウです。」

タギル「俺はタイキさんのもう一人の後輩、明石タギルです。」

ダン「よろしくな。」

まゐ「私達この世界に来たばかりだから分からないことがあったら聞くわ。」

ユウ「はい。」

タイキ「2人は俺を探す為にこの世界に来たんだろ?」

ダン「ああ。」

まゐ「その様子だと全部知っているみたいね。」

ユウ「僕達もタイキさんから聞いています。」

タイキ「明日この場所に来てくれ。俺の仲間とここに集まる。そこで色々話し合おう。」

タイキはダンに一枚の地図を渡した。

ダン「分かった、明日此処でまた会おう。」

まゐ「そこで色々情報交換しましょう。」

タギル「うっす!」

そして本日は解散となった。

翌日、ダンとまゐはタイキから渡された地図を頼りに集合場所に向かっていた。

ダン「ここか。」

まる「早速入りましょう。」

ダンとまるは建物の中に入った。

まる「お邪魔します。」

タイキ「お、来た来た。」

2人はある一室に入るとタイキ、ユウ、タギルと昨日いなかったメンバーがいた。

キリハ「お前達がタイキが言っていた2人か。」

ダン「ああ。」

ユウ「まあ立ち話なんだすし座ってください。」

全員はそれぞれ適当な場所に座った。

キリハ「まずは自己紹介だな。俺は蒼沼 キリハ、仮面ライダーカイザだ。」

ネネ「私はユウの姉の天野ネネ、仮面ライダーデルタよ。」

アカリ「初めまして、タイキの幼馴染の陽ノ本 アカリです。」

ゼンジロウ「剣 ゼンジロウ、工藤タイキのライバルだ！」

アカリ「自称でしょ。(――;)」

タイキ「はははは(???)」

ダン「次は俺達だな。俺は馬神弾、仮面ライダー龍騎。」

まる「私は紫乃宮まる、仮面ライダーファムよ。ダンとは恋人同士よ。」

ユウ「そうなんですか!？」

タギル「確かに仲良さそうですね！」

タイキ「揶揄うなタギル。こつちが相棒のシャウトモンだ。」

シャウトモン「俺はデジタルワールドの王様、シャウトモンだ！」

ダン「デジモンの王様!？」

タギル「こつちが俺の相棒ガムドラモンだ！」

ガムドラモン「俺つちがデジタルワールド一の暴れん坊、ガムドラモンだ！」

まる「頭悪そうだなデジモンね。」

ガムドラモン「なんだと!？」

キリハ「こいつらが俺の相棒のグレイモンとメールバードラモンだ。」

グレイモン「よお。」

メールバードラモン「よろしく頼む。」

ダン「俺達が知っているグレイモンとは色が違うな。」

まる「ええ。」

アカリ「どういふことですか?？」

ダン「俺達の世界ではデジモンは架空の存在なんだ。」

シャウトモン「どういうことだ？」

タイキ「作り話つてことだよ。」

ガムドラモン「なんだつてー!?!」

タギル「そんな世界あるんすか!?!」

キリハ「まあ2人は別世界から来たんだ。存在してもおかしくない。」

ネネ「そうね。」

メルヴァアモン「そして私がメルヴァアモンだ。」

ここでそれぞれの自己紹介を終えた。

するとタイキはダンの腰についてカードケースに目が行った。

タイキ「ダン、その腰のデッキってもしかしてバトルスピリッツ？」

ダン「そうだけど？」

タイキ「やつぱり。ダンはカードバトルだったんだ。」

ダン「この世界にもあったのか。」

キリハ「懐かしいな。」

アカリ「キリハ君もやってたの？」

キリハ「昔な。」

ダン「良かったら今度バトルしないか？」

タイキ「いいよ。」

まゐ「ダンは強いよ。今はライダーとして戦っているけど昔は激突王やブレイブ使
いって言われてたから。」

タギル「激突王？」

ダン「赤のスピリットで激突って言う効果があるだろ？俺はよくそれを使っていた
んだ。」

ユウ「なるほど。」

ネネ「ブレイブ使いつてことはブレイブを沢山使っていたのね。」

まゐ「ええ。」

ダン「まゐも結構強いぞ。昔は呪撃を中心のデツキだったんだ。今はWノヴァのデツ
キだ。」

アカリ「昔は呪撃で今はWノヴァ。」

キリハ「凄いな。」

ゼンジロウ「うんうん。」

ダン「ところでタイキはファイズのベルトをどうやって手に入れたんだ？」

タイキ「デジタルワールドって知ってるよな。」

まる「確かデジモン達の暮らす世界だったわね。」

タイキ「俺がファイズギアを手に入れたのはその世界に行く1年前、小学5年生の時だった。」

ダン「小5!?!」

まる「そんな小さい時に!?!」

ネネ「私もデジタルワールドでそのことを聞いた時は驚いたわ。」

アカリ「ネネ知ってたの!?!」

ネネ「ええ。」

キリハ「俺はこっそり聞いてた。」

一部は知らなかったようだ。

タイキ「その時俺はあの事件に遭遇した。」

回想

タイキがまだ小5だったこの日、バスケットの助っ人の役目を終えて家に帰宅中のことだった。

タイキ「今日も頑張ったし早く帰るか。」

???「イーーーーー!」

タイキ「な、何だ!？」

タイキは謎の集団を見つけて直ぐに隠れた。

タイキ「あれは一体?」

子供「うわあ!？」

タイキ「!？」

タイキは近くに自分より小さい子供を発見した。謎の集団もそれを見つけた。

??? 1 「オイ! こんなところに餓鬼がいるぞ。」

??? 2 「丁度いい。こいつを連れていけ。」

謎の集団 「二」「イーーーーー!」「三」

謎の集団はその子供を連れて行こうとした。

タイキ「危ない!」

タイキはその子供を庇おうとした。その時、

タイキ「!？」

突然視界が白くなった。

タイキ「・・・・あれ、ここは?」

視界が見えるようになるとタイキは白い空間にいた。

??? 「よっ! 無事みたいだな。」

タイキ「!?」

声のした方向を振り向くと1人の男がいた。

タイキ「貴方は？」

巧「俺は乾巧、よろしくな。」

タイキ「あ、はい。」

タイキは少し戸惑った。

巧「でお前の名前は？」

タイキ「く、工藤タイキです。」

巧「タイキか、いい名前だな。それよりもさっきの見たぜ。あの子供を助けるために自分の体を張って守ろうとするとはな。」

タイキ「ありがとうございます。でもあいつ等は一体？」

巧「奴らはシヨツカード。」

タイキ「シヨツカード？」

巧「あらゆる世界に現れて人間を怪人に改造したり相手の心を利用したりして世界征服を企んでいる悪の組織だ。」

タイキ「そんな奴らがどうして？」

巧「必要な戦力を得るためだろう。それでどうする？　このまま逃げるってのもある

が戦うにしても覚悟があるのか？」

タイキ「……………」

タイキは黙ってしまった。自分は困っている人を見つけるとほっとけない性格だといふのは分かっている。だが、シヨツカーと戦うことで命を落としてしまうかもしれない。タイキに迷いが生じる。

巧「なあタイキ、お前に夢はあるか？」

タイキ「え？ 夢ですか？」

巧「ああ。俺も最初は夢なんて無かった。だが誰かの夢を守ることはできた。夢が無ければゆつくり見つけるといい。」

タイキ「……………乾さん、俺戦います！ 今の俺には夢はありません。でもこのままじゃほっとけない！」

巧「そうか。ならコイツはお前に託すよ。」

巧はタイキにファイズギアが入ったアタツシケースを開けた状態で渡した。

タイキ「これは…。」

巧「俺もこれを使って仮面ライダーとして戦っていた。俺はお前にこの力を託すために現れたんだ。大事に使ってくれ。」

タイキはファイズギアを受け取った。

巧「じゃあ俺はもう行くよ。」

タイキ「えっ、乾さん!？」

再び視界が白くなった。気が付くと元の場所にいた。渡されたファイズギアもちやんとあつた。

タイキ「乾さん、貴方の意志は俺が継ぎます!。」

タイキは覚悟を決め、変身する準備をした。

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキはファイズフォンに変身コードを入力してファイズフォンを頭上に翳しながら構える。

タイキ「変身!。」

『Complete!』

ファイズドライバーに突き立てて倒すとタイキは仮面ライダーファイズに変身した。

身長は大人ぐらいの高さに変わった。ファイズは子供の前に立つ。

BGM : Just i φ ' s

ファイズ「そこまでだ!」

シヨツカー戦闘員1「なに!? 仮面ライダーだと!?」

シヨツカー戦闘員2「しかもファイズだと!?」

シヨツカー戦闘員3「何故ここに!?」

ファイズ「君、早く逃げるんだ。」

子供「ありがとうお兄ちゃん。」

ファイズ「行くぞ!」

右手を軽く払い、戦いを始めた。

ファイズ「ハア!」

シヨツカー戦闘員「イーーー!」

ファイズ「ハア!」

シヨツカー戦闘員「イーーー!」

ファイズは次々と戦闘員を倒していき最後の1人にするまで追い詰めた。

ファイズ「後はお前だけだ!」

タイキ「これが俺がファイズになつたいきさつさ。」

ダン「そんなことが。」

タイキ「その後俺は時間があればこの建物の地下の訓練施設で乾さんの今までの戦いを知った。そして俺自身も強くなれるようにした。」

ユウ「だからデジタルワールドでもあんなに強かつたんですね。」

ダン「デジタルワールドでもファイズになつたのか？」

タイキ「ああ。」

ネネ「今度はその時の話をするわ。」

まる「お願いね。」

タイキのファイズとしての物語はまだまだ続く。

デジタルワールドの初陣

タイキのファイズとして初めての戦いを聞いたダンとまゐはタイキ達が初めてデジタルワールドに行った時の話を聞いていた。

ダン「シャウトモンとはそんなふうに出会ったのか。」

タイキ「ああ、キリハとネネとユウは先に行ってたよ。」

アカリ「私とゼンジロウは巻き添えになったけど。」

タイキ「すいません。(ー；)」

ダン「どんな戦いだったんだ？」

タイキ「マッドレオモンっていうデジモンをシャウトモン×2で倒した後のことなんだけど。」

回想

マッドレオモンをシャウトモンとバリスタモンをデジクロスしたシャウトモン×2で撃退した（詳しくはデジモンクロスウォーズ第2話）タイキ達はシャウトモン達が住んでいる村に戻ろうとしてた。

タイキ「それにしてもシャウトモンがキングになる夢にあんな理由があつたなんて。」
シャウトモン「まあな。」

タイキ「ん？」

するとタイキは何かの気配を感じた。

アカリ「どうしたのタイキ？」

タイキ「なんでもない。皆は先に戻っていてくれ。後で戻る。」

ゼンジロウ「おう、分かった。」

タイキにそう言われて皆は村に戻った。

崖の上

スパロウモン「ネネ、あいつどうしたんだろう？」

ネネ「分からないわ。」

その様子を当時チームトワイライトだったネネがスパロウモンと一緒に見ていた。

タイキ「・・・さてと、隠れてないでそろそろ出てきたらどうなんだ？」

???「ほう、気づいていたか。」

すると茂みから両手が刃でジャガーの顔をした怪人が現れた。

崖の上

ネネ「!?」

スパロウモン「な、何あいつ!?」

ハサミジャガー「俺の名はデストロンのハサミジャガーだ！」

タイキ「けど今はシヨツカーの一員なんだろう？」

ハサミジャガー「そうだ。うちの戦闘員が急に連絡不能となつてな。調べたところ貴様に全滅されたらしいな。」

タイキ「1年前のあれか。」

ハサミジャガー「ここで始末させてもらう！」

タイキ「悪いけどまだ消える訳にはいかないな。」

そう言つてタイキはファイズギアを取り出しファイズドライバーを装着した。

崖の上

ネネ「あれは!?!」

ファイズドライバーを装着したタイキはファイズフォンに変身コードを入力する。

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキはファイズフォンに変身コードを入力してファイズフォンを頭上に翳しながら構える。

タイキ「変身!」

『Complete!』

タイキはファイズに変身した。

崖の上

ネネ「え!?!」

スパロウモン「か、カツコイイ。」

ハサミジャガー「貴様がファイズか。」

ファイズ「そういう事。行くぞ!」

???「待ちたまえ。」

ファイズ「え？」

ファイズの背後に灰色のオーロラが現れて中からウオズが出てきた。

崖の上

ネネ「誰か来た。」

スパロウモン「何なの？」

ファイズ「どちら様？」

ウオズ「私の名はウオズ。取り敢えず祝わせてくれ！」

ファイズ「え？」

崖の上

ネネ「何をする気かしら？」

ウオズはファイズの前に出ると祝いの言葉を言う。

ウオズ「祝え！ 人間の為に戦い続けた平成4番目の仮面ライダー！ その名も仮面

ライダーファイズ！ 夢を守る戦士の再臨である！」

ファイズ「……。」

崖の上

ネネ「……………」

スパロウモン「……………」

ウオズ「では私はこれで。」

そう言うとうオズは灰色のオーロラの中に消えるのだった。

ファイズ「ええっと（汗）」

崖の上

スパロウモン「あの人間、何しに来たの？（汗）」

ネネ「さあ（汗）」

ファイズ「まあ気を取り直して行くぞ！」

BGM : Dead or alive

ハサミジャガー「死ねえー！ー！」

ファイズ「ふっ！」

ファイズは左腕でハサミジャガーの刃を受け止め、ファイズドライバーからファイズフォンを外してフォンブラスターに変形させてコードを入力する。

『1・0・3』

『ENTER』

フォンブラスター『Single Mode!』

ファイズ「ハア！」

バンバン！

ハサミジャガー「グツ!?!」

『1・0・6』

『ENTER』

フォンブラスター『Burst Mode!』

ファイズ「ハア！」

バンバンバンバンバン！

ハサミジャガー「グワア!?!」

それぞれ単発銃、連発銃モードにしてハサミジャガーに撃つ。

ハサミジャガー「くそー！」

ハサミジャガーは苛立ちを感じそのまま突撃していくが、

ハサミジャガー「グワア!？」

オートバジンが現れてハサミジャガーを突き飛ばした。

ファイズ「俺はここで負ける訳にはいかないんだ！」

ファイズフォンを戻してオートバジンからファイズエッジを抜刀した。

ハサミジャガー「おのれ！」

ファイズ「行くぞ！」

ファイズはファイズエッジでハサミジャガーと刃と交え徐々に追い詰めた。そしてファイズフォンに着いているミッションメモリーを外し、ファイズエッジにセットした。

『Ready!』

ファイズ「止めだ！」

ファイズフォン『Exceed Charge!』

ファイズフォンのエンターキーを押すとフォトンストリームを通じてフォトンブラッドがファイズエッジにチャージされる。

ファイズ「ハア！」

ファイズは下から光波を斬り上げて光波を放出し、ハサミジャガーを光波で拘束して

宙に浮かせる。

ハサミジャガー「のわあ!?!」

ファイズ「・・・ハアアアアア!　ハア!　ハア!」

ハサミジャガーに向かって走り出し、そのまま斬撃を加えるスパークルカットをハサミジャガーに繰り返し出す。

ハサミジャガー「レーザーザー!!!」

ハサミジャガーは体にΦの文字が浮かび上がって爆発した。

崖の上

スパロウモン「す、凄い。」

ネネ「・・・。」

タイキ「さてそろそろ戻るか。」

タイキは変身を解除してシャウトモンの村に戻った。

回想終了

タイキ「デジタルワールドでは最初の変身はこんなだった。」

アカリ「だからあの時先に戻る様に言ったんだ。」

ダン「というかウオズ、タイキの時も現れたのか（汗）」

まる「でも何で最初の時に出てこなかったのかしら？（汗）」

タイキ「まあそれはいいとしてその時の戦いをネネが見ていたことは知らなかったよ。」

ネネ「うん。でもその後私も乾巧さんに会ってね。」

回想

タイキのファイズとしての戦いを見たネネとスパロウモンはまだそこにいた。

スパロウモン「凄かったね、さっきの。」

ネネ「う、うん。」

先程のタイキの戦いを見てネネはどこか心配そうな表情だった。その時、

???「流石俺が見込んだ奴だな。」

ネネ・スパロウモン「!?!」

先程の戦いを見ていたのか乾巧がそこにいた。

ネネ「貴方は？」

巧「俺は乾巧。あいつにあの力を与えた本人だ。」

ネネ「貴方が!?! どうしてタイキ君にあんな物を!?!」

スパロウモン「ネネ？」

余りのネネの変わりように戸惑った。

巧「元々あの力は俺のだったけど、あいつなら俺の力を受け継げると思ってたな。どうやら期待通りだった。」

ネネ「でもだからって。」

巧「あいつは自分の意思でファイズになると決めたんだ。誰もどうこう言うことはできない。」

ネネ「……。」

巧「納得してなさそうだな。どうするかはお前次第だ。」

ネネは何も答えず後ろを向いて行ってしまふ。

巧「あ、そのデジモン。」

スパロウモン「え、僕のこと？」

巧「ああ。お前にこいつを預けておく。」

巧はデジタル腕時計型のアイテムをスパロウモンに渡した。

スパロウモン「これは？」

巧「ファイズアクセル、ファイズのパワーアップアイテムの一つだ。タイキが十分強くなったら渡そう思ってたな。」

スパロウモン「何で僕に？」

巧「なんとなくそうした方がいいと思ってな。じゃあな。」

スパロウモン「あ、ちよつと!？」

巧は消えた。

スパロウモン「・・・まあファイズっていうのはかつこよかつたから持ってもいいか。」

ネネ「スパロウモン早く来なさい。」

スパロウモン「あ、今行く！」

スパロウモンは慌ててファイズアクセルをしまい、ネネの元に急いだ。そしてネネはある誓いを立てていた。

ネネ「絶対にタイキ君が戦わずに済む方法を見つけないと。」

回想終了

まゐ「そんなことがあったんだ。」

アカリ「初めて会った時明るく振る舞っていたけど、表に出さないようにしてたのね。」

タイキ「なんかごめんな。」

ネネ「ううん、好きな彼氏を心配するのは当然でしょ？」

ダン「え？もしかして・・・。」

まる「貴方達、付き合ってたの!？」

タイキ「あはは、まあ／＼／」

ネネ「はい／＼／」

ダン「どういった経緯で？」

タイキ「まあそれはおいおい話すとして。」

キリハ「続きを聞こうじゃないか。」

まる「それもそうね。」

ユウ「はい。」

タイキのフェイスとしてのデジタルワールドの活躍はまだまだ続く。

アクセルフォーム見参

デジタルワールドの最初のファイズの活躍を聞いたダンとまゐはベルゼブモンの話まで聞いていた。

ダン「そっか、ベルゼブモンはバアルモンだった時最初は敵だったけど仲間の仇をとるためにバグラ軍に。」

まゐ「大変だったのね。」

ベルゼブモン「あまりその話題は出さないでくれ。女神に認められなかったあの時の姿は思い出したくない。」

ダン「でも誇りに思ってもいいと思うな。」

まゐ「うん、私もそう思う。」

タギル「そうっすよ。」

メルヴァモン「私もだ。」

ベルゼブモン「やめてくれ恥ずかしい／＼／＼」

ベルゼブモンは顔を赤くして片手で覆う。

ダン「サンドゾーンの次は何処に着いたんだ？」

タイキ「ヘブンゾーンっていう所だ。」

アカリ「あそこは大変だったわ。」

まる「何があつたの？」

ゼンジロウ「スラツシユエンジエモンってデジモンに処刑されそうになつたんだ。」

ダン「処刑って、何があつたんだ？（汗）」

タイキ「キャピモンっていうデジモンが壊した天使の像の犯人って決めつけられたんだ。」

まる「それだけで？（汗）」

タイキ「スラツシユエンジエモンはヘブンゾーンの秩序をバグラ軍から守るために無意識に厳しくなつてたらしいんだ。」

ダン「そいつなりに思つてのことだったのか。」

シャウトモン「まあな。そして俺がベルゼブモンを含めたシャウトモン×4Bになつて勝つたから改心したよ。」

まる「そっか。」

タイキ「けどヘブンゾーンはかつて闇の力に覆われた世界で、コードクラウンの力とヘブンゾーンの住人達の清き心によって、闇の力はコードクラウン共々闇の空中神殿に封印されていたからバグラ軍でも手出しができない程だった。」

ネネ「当時トワイライトだった私はその闇の力を手に入れるためにスパイとして潜伏していたバグラ軍のルーチェモンと手を組んでいたわ。」

ダン「ルーチェモン？」

まる「私知ってる。デジモンフロンティアっていうアニメの天使型デジモンでラスボスよ。」

アカリ「ルーチェモンは住民を厳しい規則から解放しようとしていたけどコードクラウンを手に入れるための演技だったの。」

ゼンジロウ「まんまと騙された俺達は闇の空中神殿の封印を解かれました。」

タイキ「そしてダークナイトモンの攻撃を受けたシャウトモンが動けなくなるとき。」

回想

ダークナイトモンの攻撃を受けたシャウトモン（詳しくはデジモンクロスウォーズ第16話）は動けなくなり絶体絶命であった。だがタイキを始めとしたクロスハートは諦めなかった。フォールダウンモードになったルーチェモンと対峙した。デジモン達は苦しみながらもルーチェモンを止めるが敵わなかった。

タイキ「ルーチェモン、今度は俺が相手だ！」

ルーチェモン「この私に挑もうというのか、愚か者め。」

タイキ「・・・誰が生身で戦うって言った？」

ルーチェモン「なに？」

タイキ「あまり使いたくなかったけど。」

タイキはファイズドライバーを腰に装着した。

アカリ「タイキ？」

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキはファイズフォンに変身コードを入力してファイズフォンを頭上に翳しながら構える。

タイキ「変身！」

『Complete!』

タイキはファイズに変身した。

ルーチェモン「な、なんだ貴様は!？」

ファイズ「仮面ライダーファイズ。」

アカリ「仮面ライダー。」

ゼンジロウ「ファイズ。」

空中神殿

その頃ネネは。

モニタモン「ネネ様！」

ネネ「どうしたの？」

モニタモン「これを見て下さい！」

モニタモンのモニターからファイズに変身したタイキが映し出された。

ネネ「タイキ君!？」

ダークナイトモン『ほう、これがファイズというものか。』

ネネ「スパロウモン！」

スパロウモン「は、はい!!」

ネネ「直ぐにタイキ君のところに連れて行って！」

ファイズ「いくぞ！」

ルーチェモン「生意気な！」

ファイズ「ふっ！」

ルーチェモンの攻撃を躲し、ファイズフォンをフォンブラスターに変形させる。

『1・0・3』

『ENTER』

フォンブラスター『Single Mode!』

ファイズ「ハア！」

バンバン!

ルーチェモン「ぐっ！」

『1・0・6』

『ENTER』

フォンブラスター『Burst Mode!』

ファイズ「ハア！」

バンバンバンバンバン!

ルーチェモン「うっ!? 小癩な！」

ファイズ「ふっ！」ガキイン

ファイズエッジでルーチェモンのクローを受け止める。

アカリ「す、すごい。」

ゼンジロウ「無駄のない動きだ。」

ルーチェモン「おのれ！ ならば今すぐ葬ってくれ！」

ルーチェモンは憤りを感じると右手を挙げて火球を出現させる。

ファイズ「マズイ！」

ルーチェモン「くらえ！」

火球を投げベルゼブモンが食い止めようとするが間に合うことなくファイズ達に命中しようとした。だが、衝撃が中々来なかった。ファイズが恐る恐る目を開けるとシャウトモンが立ち上がって受け止めていた。

ファイズ「シャウトモン！」

ルーチェモン「なんだと!? お前何故!?!」

シャウトモン「聞きてえか? 聞きてえだろうな、俺が何故立ち上がってきたのか。てめえの言ってることが腹が立ち過ぎて痛みが吹っ飛んじまったからだよ!」

ルーチェモンの攻撃をスタンドマイクの武器で跳ね返す。それからは原作通り。

シャウトモン「さあタイキ、デジクロスだ！」

ルーチェモン「させるか！」

ルーチェモンは食い止めようとするがベルゼブモンの妨害が入る。

ベルゼブモン「今だ、タイキ！」

ファイズ「ああ！」

ファイズはクロスローダーを構える。

ファイズ「シャウトモン！」

シャウトモン「Oh Yeah！」

ファイズ「バリスタモン！」

バリスタモン「ンガ！」

ファイズ「ドルルモン」

ドルルモン「ワウ！」

ファイズ「スターモンズ！」

スターモン「ハーイ！」

ピックモンズ「イエーイ！」

ファイズ「ベルゼブモン！」

ベルゼブモン「ふっ！」

ファイズ「デジクロス！」

『デジクロス!!』

シャウトモン×4B「シャウトモン×4B！」

シャウトモン×4Bとなりルーチエモンと交戦を開始した。

ファイズ「よし、俺も！」

ネネ「タイキ君！」

ファイズ「!？」

ファイズの前にネネが立ち塞がった。

ファイズ「ネネ!? でも何で？」

ネネ「クロスローダーは闇の空中神殿に暗黒の力を吸収させたまま置いてきたわ。」

ファイズ「そんなことできるのか？」

スパロウモン「普通はできない。」

ドーン!

ファイズはシャウトモン×4Bがルーチェモンと激しい戦闘を繰り返している方向を向いた。

ファイズ「行かないと！」

しかしネネは行こうとするファイズの手を掴み制する。

ネネ「行つてはダメ！」

ファイズ「けどこのままじゃ!？」

ネネ「タイキ君がファイズになって戦う義務なんてないのよ！」

スパロウモン「ネネ。」

ファイズ「……ネネ、これは義務なんかじゃない。」

ネネ「え？」

ファイズ「これは俺が自分の意思でやると決めたんだ。だから俺は戦って勝って、必ず戻る！ それとありがとう、心配してくれて。」

ファイズはネネの手から離れルーチェモンも元に向かう。

BGM : ×4B THE GUARDIAN

シャウトモン×4B「負けるものか！」

ルーチェモン「無駄な抵抗さ！ 僕は、勝つ！」

ルーチェモンは先程よりも巨大な火球を生み出す。

ルーチェモン「デッド・オア・アライブ！」

シャウトモン×4Bは攻撃を受け止めるがルーチェモンは更に二つの火球を投げる。

ルーチェモン「ふーん」

シャツコウモン「アラミタマ！」

ルーチェモン「!？」

シャツコウモンが援護をして当たらずに済んだ。

シャツコウモン「今だ、心正しき者達よ！」

ファイズ「シャウトモン×4B！ その技ごと相手を突け！」

シャウトモン×4Bは言われた通りにルーチェモンに突進する。ルーチェモンは防

ネネ「タイキ君！」

ファイズ「ネネ。」

ネネは既に戻っていた。

ファイズ「悪いけど今は……。」

ネネ「クロスローダーを取るわ。だからその後タイキ君も変身を解いて！」

ファイズ「え？」

ネネ「いいわね！」

ファイズ「は、はい。」

アカリ「ネネどうしたのかしら？」

ゼンジロウ「さあ？」

ネネが自身のクロスローダーに手に取ったその時、

ネネ「!？」

スパロウモン「ネネ!？」

ファイズ「ルーチェモン!？」

倒したと思われるルーチェモンが現れ、ネネを捉えた。その拍子にネネはクロスローダーを落とした。

シャウトモン「まだ生きてたのか!？」

ルーチェモン「そうだ。この邪悪なオーラを吸って、僕は強くなり蘇るはず。」
ネネ「ダメよ、貴方には無理だわ。」

ルーチェモン「うるさい！ 交渉は決裂だ。」

ルーチェモンは闇のオーラを横取りし吸収するが制御しきれず闇に飲み込まれた。
ファイズ「どうなったんだ？」

ベルゼブモン「あれは!？」

恐る恐る目を開けるとそこには。

ルーチェモン「・・・。」

バリスタモン「ンガ？」

シャウトモン「ルーチェモン？」

ルーチェモン『えへへ。コードクラウンなんてもうどうでもいいです。』

ファイズ「様子がおかしい。どうしたんだ一体？」

ルーチェモン『この力があれば!!』

ルーチェモンがサタンモードになりネネもゲヘナに取り込まれた。

ドルルモン「どうやらただの怪物になったみたいだな。」

そう言った瞬間ルーチェモンはあたりかまわず攻撃を仕掛ける。

ゼンジロウ「何かやばくないか!？」

ファイズ「一旦退いて体勢を立て直そう！俺が時間を稼ぐ！」
アカリ「でもタイキは!？」

ファイズ「俺は別の手段で脱出する。早く！」
ゼンジロウ「わ、分かった！」

アカリ達は空中神殿から脱出の準備をする。

ファイズ「さて、やるとするか。」

ファイズとルーチェモンの戦いが始まった。

ルーチェモンはファイズを見つけると必要以上に攻撃を仕掛ける。

ファイズ「どうやら俺に対する記憶が残っているようだな。」

自我を失つてもタイキに対する憎しみが残っていたようだ。

ネネ「タイキ君。」

ゲヘナの中のネネは心配そうに見ていた。

そうしている間にクロスハートは全員脱出した。

ファイズ「よし、皆避難したな。」

ルーチェモン「ワアアアアア！」

ファイズ「おっと!？」

ネネ「タイキ君！」

何とかルーチェモンの攻撃を躲す。

ファイズ「俺だけは絶対逃がさないってことか。」

ネネ「スパロウモン！」

スパロウモン「ネネ？」

ネネ「お願い！ タイキ君を助けて！」

スパロウモン「え？」

ネネ「いいわね！」

スパロウモン「は、はい——！（汗）」

言われるがままにスパロウモンはファイズを助けに行く。

ファイズ「さて、どうする？」

スパロウモン「つかまって！」

ファイズ「!? スパロウモン！」パシ！

スパロウモンの伸ばされた手を取り、何とか脱出した。

ファイズ「危なかった。助かったよスパロウモン。」

スパロウモン「何かネネがお前を連れて逃げてって言ったからね。一緒に助けてくれ

る？」

ファイズ「ああ。今回ことはネネの所為かもしれないけど黙って見ているわけにはい

かないからな。」

空中神殿から脱出したクロスハートはスパロウモンを交えて作戦会議をしていた。最初は少し小競り合いがあった。

シャッコウモン「あれは暗黒球という心の闇を吸収する球だ。恐らくあの少女は心に大きな闇を抱えてそのせいで。」

アカリ「じゃあどうしたら・・・。」

タイキ「・・・ファイズアクセルさえあれば。」

スパロウモン「ん？」

それを持つてるスパロウモンがタイキの発言にいち早く反応した。

アカリ「ファイズアクセル？」

シャウトモン「なんだそりゃ？」

タイキ「ファイズのパワーアップアイテムの一つだ。それを使えば10秒間10000倍の素早さを出してあの球体に穴を開けられる。ただ…。」

ゼンジロウ「ただ？」

タイキ「今ファイズアクセルは手元に無いんだ。」

シャウトモン「はあ!？」

タイキ「というより最初から無かった。俺にファイズの力を与えてくれた人曰く、最

「初から全部渡したら面白くないって。」

ドルルモン「なんだそれ？（汗）」

スパロウモン「（それって乾巧のこと？）」

タイキ「けどない力を頼っても仕方ない。」

ファイズフォンを見ながら呟く。

タイキ「やるしかない！」

スパロウモン「ねえ。」

タイキ「ん？」

スパロウモン「どうしてそうまでして戦えるの？」

タイキ「…誰かの夢を守るって決めたからな、俺は。」

スパロウモン「え？」

すると突然地震のような揺れが起き、偵察に行っていたベルゼブモンから連絡がきた。

ベルゼブモン『タイキ！こちらベルゼブモン。悪い知らせだ。』

全員急いで部屋の外に出た。

シャッコウモン「ルーチェモンめ、闇の力だけでなくゾーンのデータ自体を吸収し始めたのか？このままではデジモンも町も奴に？み込まれてしまう。」

タイキ「バリスタモン、リスターを1つ作ってくれ。」

バリスタモン「了解。」

バリスタモンはリスターを1つ作り、タイキに渡す。受け取ったタイキはそれを石の上に置く。

タイキ「スパロウモン、良かったらこれを使ってくれ。」

スパロウモン「う、うん。」

スパロウモンは素直に受け取れなかった。

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキ「変身!」

『Complete!』

タイキは再びファイズに変身する。シャウトモン達も×4にデジクロスした。ゼンジロウ「けど相手は空を飛んでいるんだぞ。どうやって戦うんだ?」

ファイズ「これを使う。」

『3・8・2・1』

『ENTER』

ファイズフォン『Jet Slinger. Come Closer.』

ファイズフォンでコードを入力すると後ろに複数のジェットターボが付いた二輪車が現れた。

シャウトモン×4「こ、こいつは…。」

ファイズ「ファイズ専用のエアバイク、ジェットスライガーだ！」

アカリ「ジェットスライガー？」

ファイズ「×4、ジェットスライガーに触れてみる。」

シャウトモン×4「お、おう。」

シャウトモン×4はジェットスライガーに触れた。するとジェットスライガーは×4が乗れる程の大きさに変わった。

ゼンジロウ「おおおー！」

ファイズ「ジェットスライガーは後から設定されたけど乗る者によって大きさを変えることができるんだ。これを使えば陸・海・空を駆けることができる。」

×4はジェットスライガーに跨る。

シャウトモン×4「こりゃあいい！」

ファイズ「よし、俺はオートバジンで！」

シャツコウモン「では行くぞ！」

シャツコウモンの瞬間移動によりクロスハートは空中神殿に向かった。残されたスパロウモンは見守ることしか出来なかった。

スパロウモン「ネネはどうしてクロスハートのジェネラルのことをあんなに。」

そう疑問に思いながらネネの救出のために空中神殿に向かった。その途中ダークナイトモンやモニタモン達と合流した。だがダークナイトモンはゲヘナの様子を見るために直ぐにネネは助けに行かなかった。

スパロウモン「このまままだネネが死んじゃう。」

ダークナイトモン『だが、方法があるとすればただ一つ。工藤タイキ君、彼にファイズアクセルを渡すしかない。』

スパロウモン「た、確かにそうだけど。」

ダークナイトモン『迷っている暇はないぞ。』

スパロウモン「……。」

スパロウモンは無言のまま空中神殿に向かった。

一方クロスハートはルーチェモンに苦戦を強いられていた。スパロウモンも加わりファイズがバトルモードになったオートバジン、シャウトモン×4がジェットスライガーに乗りながらルーチェモンとの戦闘が再開されたがサタンモードとなったルーチェモンは手強く簡単には倒せなかった。

スパロウモン「(こうなったら仕方ない。ネネには悪いけど。) タイキ君！」
ファイズ「？」

スパロウモン「受け取って！」

ファイズ「おっと!？」

ネネ「あれは!？」

ファイズはスパロウモンからファイズアクセルを受け取った。

ファイズ「ファイズアクセル!?! どうして!?!」

スパロウモン「説明は後! 早くそれを使って!」

ファイズ「わ、分かった!」

BGM : The people with no name

ファイズは早速ファイズアクセルを左腕に装着してファイズフォンのミツシヨンメモリーを外し、ファイズアクセルのアクセルメモリーをファイズフォンにセットした。

『Complete!』

するとファイズの胸部の装甲「フルメタルラング」が展開され内部機構が露出し、赤色のフォトンストリームも銀色のシルバーストリームに変色する。これこそファイズ・アクセルフォームだ。

ネネ「タイキ君。」

ファイズ「時間がないから10秒で決める！」

ファイズアクセル『Start up!』

ファイズアクセルのボタンを押しファイズのスピードが上がる。

ファイズ「ハッ！ ふっ！ ハッ！ ふっ！ ハッ！」

シャウトモン×4「は、早え。」

高速でゲヘナの一ヶ所に何度も攻撃する。そして、

パリッ パリーン！

ゲヘナにヒビが入り、穴が開いた。

ファイズアクセル『3∴2∴1∴Time out!』

『Reformation!』

タイムリミットとなり通常のファイズに戻った。

ネネ「キャー!?!」

ファイズ「スパロウモン、今だ！」

スパロウモン「おう！」

ゲヘナから飛び出たネネを原作通りにキャッチした。

ファイズはゲヘナの上でその様子を見て安堵した。

ルーチェモン「グワーツ！」

ファイズ「!? しまった！」

油断したファイズの間を突き、ルーチエモンが追撃しようとした。

ネネ「タイキ君!？」

シャウトモン×4「させるか！」

×4がジエットスライガーから飛び降りファイズを守った。

ネネ「スパロウモン！」

スパロウモン「う、うん！」

落ちるファイズと×4をスパロウモンが上に乗せる。

ファイズ「助かった。」

変身を解除する。

ネネ「よかった。それよりスパロウモン! どうしてファイズのアイテムを持ってた

の黙ってたの!？」

スパロウモン「ご、ごめんなさい。」

タイキ「ネネ、スパロウモンを責めないでやってくれ。」

ネネ「タイキ君。」

タイキ「お前を助けられてよかったよ。」

そう言っつて微笑む。

ネネ「／＼／＼」ドキッ！

タイキ「どうした？」

ネネ「な、何でもない！（何なのこのドキドキは？）／＼／＼」

これがネネがタイキを意識し始めた瞬間である。それが恋と自覚するのはまた別話。スパロウモンを加えたシャウトモン×5でルーチェモンを倒し、空中神殿もヘブンゾーンから消滅した。その後タイキはスパロウモンと会話をしていた。

タイキ「スパロウモン、どうしてファイズアクセルを持つてたんだ？」

スパロウモン「乾巧っていう人間から渡されたんだ。」

タイキ「乾さんから？」

スパロウモン「うん。なんとなく僕に渡されたけど理由が分かった気がする。今回のことで。」

タイキ「そっか。でもありがとう、スパロウモン。」

スパロウモン「こっちこそネネを助けてくれてありがとう。」

タイキ「じゃあまたどこかで。」

スパロウモン「バイバイ！」

その後スパロウモンはバリスタモンが作ったリスターを広いネネの元に帰っていた。タイキはヘブンゾーンのコードクラウンを手に入れ決意を新たにするのだった。

回想終了

タイキ「これがアクセルフォームになった切っ掛けさ。」

ダン「そんなことが。」

まゐ「ネネ、貴方少し過保護過ぎない？」

ネネ「私もあの時は無意識だったわ。でもタイキ君の覚悟を聞いたらほつとくことも出来なかつた。そんなタイキ君を見ていると好きになつちやつて、だから私も力になろうつて決めたの。」

ダン「そうか。」

タギル「いいなあタイキさん。」

タイキ「タギルもいつかいい相手が見つかるさ。」

ユウ「そうそう。」

ネネ「今日の話はここまでにしましょう。」

タイキ「2人には明日この町を案内しながら続きを話すよ。」

まゐ「ありがとう。」

ダン「よろしく頼む。」

ユウ「はい！」

こうして1日目の交流が終わった。

ファイズVSダークナイトモン

交流2日目、ダンとまゐりはタイキ達の案内で町を観光していた。

ダン「すまないな案内してもらって。」

タイキ「いいんだよ、気にしなくて。」

ネネ「2人にも紹介したい場所もあるし。」

因みにネネは今香港でアイドルをやっているのでファンにバレないように変装している。そしてタイキと手をつないでいる。まゐもダンと腕を組んでいた。デジモン達はクロスローダーの中。

まゐ「よっぽどタイキ君のことが好きなのね、ネネは。」

ネネ「うん。まゐさんがダンさんのことを想っているように。」

ユウ「タイキさんが姉さんの彼氏なら大歓迎です！」

ネネ「もう、ユウったら／＼／」

ダン「でもアカリは良かったのか？ 幼馴染なんだろ。」

アカリ「大丈夫。タイキが幸せなら私も応援するって決めたから。」

タイキ「アカリ。」

ネネ「ごめんね。」

アカリ「ううん。タイキのこと、よろしくね。」

ネネ「ええ。」

ゼンジロウ「デジタルワールドでも、あの時のネネさん大胆だったな。」

キリハ「ああ。」

ダン「あの時？」

シャウトモン『ヘブンゾーンの次に着いたフォレストゾーンでの話だ。』

タイキ「その時俺はファイズになってダークナイトモンと初めて戦った。」

回想

フォレストゾーンに着いたタイキ（詳しくはデジモンクロスウォーズ第18話と第19話）はアカリとゼンジロウのライラモンに無理矢理伝授された『ラブラブダンス』で聖域の奥の祭壇にいるデッカードラモンがいる場所に到着し、ブルーフレアのジエネラ・キリハとタッグを組み、ダークナイトモンと対峙した。

その途中でダークナイトモンはスカルナイトモンとデッドリーアックスモンがデジクロスした姿と発覚し、一気に追い詰められた。

ダークナイトモン「もう終わりかね。」

タイキ「まだだ！ まだ終わりじゃない！」

そう言つてタイキはファイズドライバーを装着する。

ダークナイトモン「ほう、次は君が相手か。」

ネネ「タイキ君。」

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキ「変身！」

『Complete!』

タイキはファイズに変身した。

キリハ「た、タイキ!？」

メタルグレイモン「あれは!？」

ファイズ「行くぞ！」

数分後

暫くして、ファイズになったタイキはダークナイトモンと互換に戦っていた。

ダークナイトモン「流石だな。人間界で乾巧に選ばれただけのことはある。」
ファイズ「何でそこまで知っているんだ？」

ダークナイトモン「見ていたからね。人間界でのファイズとしての君の活躍を。」

ファイズ「そうか。ならこつちも出し惜しみなしだ！」

ファイズフォンとのミッシュンメモリーを外し、ファイズアクセルのアクセルメモリーをファイズフォンにセットした。

『Complette!』

ファイズ「いくぞ！」

ファイズアクセル『Start up!』

ファイズアクセルのボタンを押し、スピード攻撃を仕掛ける。

ファイズ「ハッ！ ふっ！ ハッ！ ふっ！ ハッ！」

ダークナイトモン「ん!？」

ダークナイトモンはツインスピアで防御する。

キリハ「なんてスピードだ。」

メタルグレイモン「速過ぎて目が追い付かん！」

ファイズ「オリヤアアアー!!」

アクセルクリムゾンスマッシュをダークナイトモンに決めようとする。だが。

ガキーン!

ファイズ「なに!?!」

ダークナイトモンはツインスピアで受け止め耐えた。

ファイズアクセル『3...2...1...Time out!』

『Reformatioin!』

制限時間となり元に戻る。

ダークナイトモン「見事な動きだ。だが、それだけでは私は倒せない!」

バシユツ!

ファイズ「うわあぁー!?!」

ダークナイトモンの攻撃を受け、ファイズはタイキに戻って倒れる。

アカリ「タイキ!?!」

タイキ「ま、まだだ。」

ファイズフォンを握りながらゆっくり立ち上がる。

ダークナイトモン「まだ立ち上がれるか。」

タイキ「俺はまだ負けるわけにはいかないからな。」

ダークナイトモン「だがファイズの力を使えば使うほど君の体は持たないのではないか?」

タイキ「お生憎様、このファイズギアはそうならないように改良されている。」
ダークナイトモン「そうか。」

ネネ「・・・。ホッ

それを聞いたネネは少し安堵した。ネネがタイキを心配していた理由はこれである。
ダークナイトモン「だが、君の命を懸けた戦いはまだ始まっていないのだから？」

タイキ「確かに俺の本当の戦いはこれからかもしれない。でもそれまでに俺自身も強
くならないと思った。俺がデジタルワールドに来た理由もそれだ。」

シャウトモン×4「タイキ、流石俺のジェネラル！」

タイキ「俺には夢がない。けど、誰かの夢を守ることはできる！」

ダークナイトモン「ほう。」

タイキ「戦うことが罪なら、俺はその全てを背負う！」

ネネ「・・・。」

タイキの覚悟を聞いたネネは静かに首を横に振りゆっくりタイキの元に走り出す。

タイキ「いくぞ！」

ネネ「やめて！ タイキくん！」ダキツ

タイキ「!？」

アカリ・キリハ「!？」

ゼンジロウ「ぬお!？」

再びファイズになろうとするとネネがタイキに駆け寄り抱き着いた。

タイキ「ネネ？」

ネネ「もうやめて。お願い。」

涙目でタイキに語りかける。

タイキ「・・・。」

タイキは静かにファイズフォンを握っていた手を下す。

ダークナイトモン「まあいいだろう。我々の目的はデッカードラモンだからな。」

そしてネネが弟・ユウのためにダークナイトモンのそばに居ることを知った一行。

デッカードラモンはキリハを認めてコードクラウンを渡し、ブルーフレアのメンバーとなつた。

回想終了

ダン「タイキを止めるために無意識に。」

まる「大胆ね〜。」

ネネ「えへへ／／／」

キリハ「告白したのはもつと先の話だ。」

タイキ「まるさんがダンにしたヤツと似たようなものだったよ。」

ネネ「負けると分かってても引き止めたい一心でね。」

ダン「俺もあれがなかったら、まるの想いを受け入れてなかったかもな。」

まる「今となつては恥ずかしいけど／＼／＼」

ネネ「私も／＼／＼」

タイキ達はダンの劉備ガンダム達に話した戦いを少し前に聞いていた。

ダン「タイキ、ネネを大切にな。」

タイキ「分かつてる。」

色々談笑しながら町中を進む一行であった。

過保護なネネ

ダークナイトモンの対決を聞いたダンとまゐ。

タイキ達クロスハートの案内で街を歩き回った後とあるカフェで一休みしていた。

ダン「うん、このカレーも美味いな。」

まゐ「フフ、ダンは本当にカレーが好きね。いつかまた私が作ってあげる。」

ダン「まゐ。」

タイキ「仲がいいな、ダンとまゐは。」

ネネ「私もいつかタイキ君にいっぱい料理作ってあげる♪」

タイキ「ネネ／＼／」

アカリ「えつとブラックコーヒーどこだっけ？」

ゼンジロウ「俺も口の中が砂糖まみれだ！」

キリハ「全くあの二人が加わってからイチャイチャオーラが増したじゃないか。」

ユウ「あはは（＾＾；）」

タギル「くう、羨ましくねえ！」

ダンとまゐ、タイキとネネのいちやつきつぷりに一同は砂糖を吐いていた。

ダン「それでさっきの話を続きだけど、フォレストゾーンでの戦いの後どうしたんだ？」

タイキ「ああ。ネネが弟のユウを助けるためにダークナイトモンと一緒にいるって知った俺達は次のゾーン、ダストゾーンに向かったんだ。」

まる「名前からしてゴミが散らばっているゾーンなのね？」

アカリ「うん。」

ゼンジロウ「あの時も大変だった。」

キリハ「俺も一時的にダークナイトモンに操られて利用された。」

ダン「何で操られたんだ？」

タイキ「キリハはダークネスローダーを作るために利用されたんだ。」

まる「ダークネスローダー？」

ユウ「僕達を持つてるクロスローダーと似た機能を持つアイテムです。」

ネネ「違うのは、その場にいるデジモンが強制的にデジクロスさせられてしまうの。」

ダン「デジモンの意思に関係なく。」

まる「恐ろしいわね。」

タイキ「なんとかネネの救出には成功したけど、ネネはダークネスローダーの完成と共にダークナイトモンに見放されたんだ。」

回想

ダストゾーンに迫り着いたクロスハート。タイキはその途中でダークナイトモンに連れられダークネスローダーを起動させられた。その後投げ出され仲間達と合流したが、メタルマメモンやガーベモン達にクロスローダーを奪われダストゾーンの暴君グランドロココモンと一戦交えた。ピノツキモン達の協力もありグランドロココモンを倒した。

グランドロココモンを倒した後ダークナイトモンが配下のスカルグレイモンとスカルサタモン、操られたキリハと共に現れた。

突然襲撃を受けるもピノツキモンが埋もれていた場所を使ってクロスハートは逃げることに成功した。その翌日スパロウモンと共にネネの救出作戦を実行しようとしたが洗脳されたキリハが立ちはだかり足止めを受ける。

そこにバグラ軍・三元士の1人リリスモンやダークナイトモン達も現れた。そんな中、タイキはキリハを殴り正気に戻す。

キリハは殴られたことで正気を取り戻し、クロスハートと共にダークナイトモン達と交戦を始めた。シャウトモン達にその場を任せてタイキはスパロウモンと共にネネが

幽閉されている塔に向かった。どうにか辿り着きネネを解放する。塔にいるネネはこれからもファイズとして戦うタイキを心配し、タイキの説得に応じて救出された。

戦線に戻ったタイキはスパロウモンを加えたシャウトモン×5で反撃を始めた。追い詰められたと思われたダークナイトモンだが、ネネを見放してダークネスローダーを使いスカルグレイモンとスカルサタモンと強制デジクロスし、クロスハートとブルーフレアを圧倒した。だが、クロスハートとブルーフレアの一斉攻撃でなんとか回避した。

ダストゾーンの戦いを終え暫く休んでいたが、ネネが突然体調を崩した。タイキ達クロスハートはネネを回復させるためにシノビゾーンに向かうがその途中でゾーンの狭間に住むリリスモンの配下デジモン・アルカディモンの襲撃を受けタイキ以外全員捕らえられ、タイキはファイズになって反撃しようとするがゾーンの狭間に放り出されてしまう。放り出されたタイキはデジタルワールドが分裂した直後からゾーンの狭間に漂う本で研究に没頭していたワイズモンに拾われてデジタルワールドの正体と真実を知る。

タイキ「こんなことしている場合じゃない！ 早く皆を助けないと！」

ワイズモン「このゾーンの狭間の中でどうするっていうんだい？」

タイキ「これを使って！」

タイキはファイズドライバーを装着し、ファイズフォンを取り出す。

ワイズモン「ん？ それは・・・。」

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキ「変身!」

『Complete!』

タイキはファイズになり、足の鎖を破壊した。

ワイズモン「な、なんと!」

ファイズ「じゃ、またどこかで!」

ファイズはそう言って本から飛び出していった。

ワイズモン「何とも興味深い。」

ワイズモンはタイキの「ほっとけない」とファイズの力に心を動かされた。ファイズ

は何とかアルカディモンの巣に辿り着いた。

ファイズ「みんな!」

アカリ「タイキ!」

シャウトモン「無事だったか!」

ファイズとなったタイキが来たことで全員が安堵した。

アルカデイモン「グオオオオ！」

ファイズ「おっと！」

アルカデイモンの攻撃を避けてファイズアクセルのアクセルメモリーをファイズフォンにセットする。

『Complete!』

BGM : The people with no name

ファイズアクセル『Start up!』

ファイズ「ついて来れるかな!？」

アクセルフォームでアルカデイモンを翻弄する。

ファイズ「ハアアアア！」

アルカデイモン「グオオオ!？」

アルカデイモンはアクセルクリムゾンスマッシュを受けて怯む。アルカデイモンもファイズに反撃するがワイズモンの助けもあり難を逃れた。

ファイズ「よし！ 反撃開始だ！」

そしてシャウトモン×5とデジメモリのダークドラモンによりアルカデイモンは倒され、クロスハートはシノビゾーンに到着した。ワイズモンはタイキを実験動物として研究するためにクロスハートに入った。

シノビゾーンに到着したクロスハートはモニタ城の姫がバグラ軍のブラストモンの配下・ムシャモンに人質に取られ、コードクラウンを要求していることを知る。ネネの協力もあり現在のコードクラウンの所持者カラテンモンを笑わせてコードクラウンを手に入れた。そして夜に姫の救出作戦を実行し、ゼンジロウの活躍もあつて成功した。ネネも正式にクロスハートの一員となりコードクラウンを託された。そしてネネは、

タイキ「ええ〜。」

ネネ「返事は!？」

タイキ「は、はい!？」

とタイキに忠告するのだった。救出された姫はババモンというデジモンでゼンジロウは追い掛け回される羽目になった。一同は笑う。そんな中、モニタモン長老がタイキ声を掛ける。

モニタモン長老（以降長老）「タイキ殿。」

タイキ「ん？」

長老「ちよつとついてきて下され。」

タイキは長老の案内でモニタ城の地下にやって来た。

タイキ「城の地下にこんな場所があったなんて。」

長老「ここは我々しか知らない場所なのです。」

暫く歩くと暗い部屋に着いた。

長老「着きましたぞ。」

タイキ「ここは一体？」

長老「これを見て下さい。」

明かりが一時につく。するとタイキは驚くべきものを見た。

タイキ「え？」

そこにはファイイズのΦの文字が刻まれたトランスボックス型ツールがあった。

タイキ「これって、ファイイズブラスター!？」

それはファイイズの最後の強化アイテム・ファイイズブラスターだった。

タイキ「何でこんな所に!？もしかして乾さんが？」

長老「はい。このファイイズブラスターはその乾巧と名乗る人間から渡されました。バ

グラ軍からシノビゾーンを解放した後、貴方に託そうと考えていたのです。」

タイキ「そうだったんだ。」

長老「さあ、お受け取りください。」

タイキ「はい。」

タイキがファイズブラスターを取ろうとした時、

ネネ「タイキ君！」

タイキ「!? ネネ？」

いつの間にかネネがいた。

タイキ「どうして此処に？」

ネネ「こつそり後をつけてきたの。それより。」

ネネはタイキを横切り、ファイズブラスターを取る。

ネネ「これは私が預かっておくわ。」

タイキ「え？」

ネネ「タイキ君が持つにはまだ早いわ。今では敵わない敵が現れたら渡すから。」

タイキ「でも……。」

ネネ「大丈夫。私もできるだけサポートするから。」

タイキ「……分かった。暫く預けるよ。改めてよろしく頼むよ。」

ネネ「ええ。(タイキ君、ありがとう。ヘブンゾーンやダストゾーンで助けられてから私は1人じゃないって教えてもらったわ。それからヘブンゾーンでの気持ちがあつと分かったわ。まだ早いけどいつか貴方にこの思いを伝えるわ、タイキ君の事が好きだつて／＼／＼)」

ネネは心の中でそう呟くのだった。

回想終了

タイキ「それからはネネが中々ファイズになるのを許してくれなくて。」

ダン「へ、へえ〜（・―・；）」

まる「過保護過ぎ（・―・；）」

ネネ「だってタイキ君、直ぐ無茶するんだもん！」

ネネは頬を膨らませて叫ぶ。

まる「まあ私も分らないわ。ダンほつといたら絶対危険な事件に巻き込まれるし。」

ダン「でも、まるや仲間達が信じてくれるから俺は先に進めるのも事実だ。」

まる「もうダンったら、褒めても何も出ないわよ／＼／＼」

まるは顔を赤らめて目を逸らすのだった。

タイキ「俺も2人に負けないくらいネネを大切にしないとな。」

ネネ「ありがとう、タイキ君／＼／＼」

そして一同はカフェの昼食を終え、観光に戻った。

余談だが、ダンとまる、タイキとネネのイチチャつきに再び砂糖を吐いた者がいたとか、

い
な
か
っ
た
と
か。

真つ赤に染まれ！　ブラスターフォーム！

ネネがクロスハートの一員となったいきさつを聞き、カフェで一休みした一同は再び町の観光をしていた。カップル2人組は相変わらずだが。

ダン「そういえば今までの話からキリハとネネが仮面ライダーになったきっかけは出てこなかったな。」

タイキ「ああ、2人はバグラ軍との戦いが最終局面に近づいてきたときに仮面ライダーになったんだ。」

キリハ「あの時は俺達も驚いた。気がついたらデジタルワールドから昨日の建物にいたからな。」

ネネ「でもお陰でタイキ君を1人で戦わせず済んだわ。」

まゐ「それだけ心配だったのね。」

タイキ「俺ってそんなに信用できないのか？（汗）」

ネネ「勿論。」

キリハ「ほつといたら何やらかすか分からないからな。」

タイキ「（； ； ； ）トホホ（汗）」

ダン「あはは(？▽？；)」

まる「ドンマイ(汗)」

ダン「それでネネが加わってからはどうしたんだ。」

ネネ「私は一旦タイキ君達と別れて弟のユウを探したわ。」

アカリ「あたしとタイキとゼンジロウは次のゾーン、ディスクゾーンに着いたわ。」

まる「ディスクゾーン？」

キリハ「何層もの光ディスクが地盤を構成しているゾーンだ。」

タイキ「でもそのゾーンのコードクラウンは既にキリハが手に入れていた。」

ゼンジロウ「そのゾーンも老朽化していてちよつとの振動でも弱くなっていたらしい。」

タイキ「バグラ軍との戦いで崩壊してしまっただけ、ディスクゾーンの住民達をシノビゾーンに避難させたよ。」

ダン「そうか。」

まる「でも自分の領地をほったらかしにするなんて、キリハ君薄情すぎない？」

ジト目でキリハを見る。

キリハ「えっと、それはその(汗)」

ダン「逆にお前が住民達の立場だったら、どんな気持ちだったんだろうな。」

キリハ「悪かったな(汗)」

タイキ「その時シャウトモンはグレイモンとマイルバードラモンにデジクロスの中心であることを指摘されて1人で抱え込んでいたんだ。」

ダン「シャウトモンがデジクロスの中心？」

タイキ「簡単に言うと何人かを荷物のように担いでいるようなものだ。」

キリハ「奴にはその負担が大きくデジクロスを保てなかった時期があったんだ。」

まゐ「つまり、重すぎたのね？」

アカリ「それに耐えられるように私達に内緒で特訓してたの。」

ゼンジロウ「結果耐えられるようになってプラストモンを倒して、奴が持っていたコードクラウンも全部手に入った。」

ネネ「そしてタイキ君がスパードモンっていうデジモンを助けた後スイーツゾーンに行つたの。」

まゐ「スイーツゾーン!？」

ダン「うわあ!?! まゐが食いついた。」

まゐ「あ、ごめんなさい。」

タギル「まゐさんでもスイーツには反応するんだな。」

ユウ「当たり前だろ。」

タイキ「アカリがいてくれたお陰でそこで行われたバグラ軍とのスイーツ対決に勝利できた。」

アカリ「バグラ軍に捕らえられてたキュートモンの両親も救い出せたわ。」

ダン「そうか。」

まる「よかったわね。」

タイキ「その次のゾーンであるソードゾーンで最後のコードクラウンを手に入れたことでバグラ軍が集めたのを含めたコードクラウンが108個全て揃ったんだ。」

ダン「コードクラウンって全部で108個あったのか。」

まる「多いわね。」

キリハ「俺もソードゾーンに着いた後タクテイモンと交戦することになった。」

ゼンジロウ「その時のタクテイモン、いつもより強かった。」

ダン「どういうことだ?」

タイキ「タクテイモンは自分の剣である蛇鉄封神丸をバグラモンに封印を解いてもらっていたんだ。」

まる「封印?」

アカリ「その剣は星を真つ二つにするほどの力があつたの。」

ダン「星を真つ二つに!?!」

まゐ「そんな危険なものだったの!？」
タイキ「シャウトモン達もそれにやられて、俺とキリハのコードクラウンも奪われてしまった。」

回想

クロスハートとブルーフレアはタクテイモンの圧倒的な強さに苦戦していた。

タクテイモン「パーフェクト。」

タイキ「皆!」

キリハ「なんて力だ!」

タイキとキリハもコードクラウンを全て奪われてしまう。

タクテイモン「これでコードクラウンは全てバグラモン様ものだ。終わりだな。」

タイキ「いや、まだ終わっていない!」

タイキはファイズドライバーを装着する。

タクテイモン「ほう、面白い。」

ネネ「ダメよタイキ君! いくらファイズの力でも勝てる見込みはないわ!」

タイキ「例えそうでも、ここで諦めて後悔したくはないんだ!」

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキ「変身!」

『Complete!』

タクティモン「仮面ライダーファイズか。相手にとって不足はない!」

ファイズ「行くぞ!」

ファイズエッジを構えてタクティモンと交戦する。

タクティモン「中々やるな。」

ファイズ「伊達に人間界で鍛えてないさ!」

それを見ていたキリハは悔しそうに拳を握りしめる。

キリハ「俺にも戦える力があれば!」

ネネ「タイキ君。」

仲間達が見守る中、ファイズは最初は善戦していたが、蛇鉄封神丸の力も合わさっていたのでタクティモンに押されてしまう。

タクティモン「工藤タイキ、その実力は認めよう。だが、これでは私は倒せんぞ!」

ガキーン!

ファイズ「ぐっ!?!」

ファイズは思わず後ずさる。

アカリ「タイキ！」

タクテイモン「いい腕だが、まだまだだな。」

ファイズ「忠告どうも。」

ネネ（このままじゃタイキ君は勝てない！ どうしたら・・・。）

するとネネは預かっていたファイズブラスターを思い出す。

ネネ（そうだ！ ファイズブラスターがあれば。でもそれを使ったらタイキ君は・・・。）

ファイズになることの危険性を知っているネネは躊躇った。だが、フォレストゾーンでのタイキの覚悟を思い出し決意する。

ネネ（タイキ君だけに背負わせない！）

ネネはファイズブラスターをタイキに投げる。

ネネ「タイキ君！」

ファイズ「え？ うおっ!？」

ファイズはそれをキャッチする。

ファイズ「ファイズブラスター？」

ネネ「早くそれを使って！」

ファイズ「……」

ファイズはファイズフォンをファイズブラスターにセットして変身コードを入力する。

ファイズブラスター『Awakening!』

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズブラスター『Standing by!』

するとファイズの体が光り出し、全身が赤く染まった。

ゼンジロウ「ファイズが赤くなった!?!」

ファイズ「仮面ライダーファイズ・ブラスターフォームだ!」

アカリ「ブラスターフォーム」

ファイズ「行くぞ!」

BGM: Jus-tiφ s|accel mix

『5・2・1・4』

『ENTER』

ファイズブラスター『Faiz Blaster Discharge!』

ファイズブラスターにコードを入力して背部ユニットを装着する。

タクティモン「私にそれで挑むとはな。タネガシマ!」

タクティモンも背中中の砲台を構えてタネガシマを発射する。

ファイズ「ハッ!」

ファイズもブラッディキャノンを発射する。

ドーン!

キリハ「互角か!」

『5・2・4・6』

『ENTER』

ファイズブラスター『Faiz Blaster Take Off!』

ファイズ「ふっ!」

アカリ「飛んだ!?!」

ファイズブラスターに更にコードを入力し、背部ユニットを展開して飛行する。

『1・4・3』

『ENTER』

ファイズブラスター『Blade Mode!』

空中で再びコードを入力してフォトンブレイカーモードに変形させる。

ファイズ「一か八かの勝負だ!」

タクティモン「面白い!」

『ENTER』

ファイズブラスター『Exceed Charge!』

ファイズ「はあああー!」

タクティモン「壺の太刀!」

ガキイローン!

ファイズのフォトンブレイカーとタクティモンの壺の太刀がぶつかり合い強い衝撃波が発生する。

アカリ「す、凄いパワー!?!」

ゼンジロウ「どわあああー!」

キリハ「これが今のタイキの全てか。」

ネネ「タイキ君。」

ファイズ「くう、負けるかー!」

タクティモン「うおおおおー!」

ドカーン!

ネネ「タイキ君！」

激しいぶつかり合いが続いた末大爆発が発生する。

シャウトモン「タイキ！」

キリハ「どうなった!?!」

やがて土煙が晴れてきた時、ファイズはふらふらしながら立つておりタクティモンは膝をついていた。

ファイズ「くっ！」

タクティモン「まさか、この私に膝をつかせるとは。だが其方は限界の様だな！」

ファイズは止めを刺されそうになるがタクティモンの部下だったグレイドモンが守られた。グライドモンはタイキに助けられた借りを返すためにタクティモンが出現させた塔を破壊するために自爆した。

塔が破壊されたことでベルゼブモンがソードゾーンに入ってこれたこともありシャウトモンは×5Bにデジクロスできた。遂にタクティモンを倒せたが、バグラモンが発生させた超次元ストームにタイキとシャウトモン、アカリ、ゼンジロウが飲み込まれ、コードクラウンは全てバグラモンに渡ってしまった。

回想終了

タイキ「そして俺とシャウトモン、アカリとゼンジロウは人間界に戻されて・・・。」
ネネ「私とキリハ君、クロスハートの皆はデジタルワールドに残されてしまったわ。」
アカリ「戻った私達はデジタルワールドで長い時間過ごしたのに人間界ではちよつとの時間しか進んでなかったの。」

まる「時間の進み方が違うというのは同じなのね。」

ダン「デジタルワールドにはどうやって戻ったんだ?」

タイキ「伝説のデジモンの1体、オメガモンが力を貸してくれたんだ。」

ダン「オメガモンって言えば、ウォーグレイモンとメタルガルルモンが合体したデジモンだったな。」

アカリ「タクテイモンも人間界来てたわ。」

ゼンジロウ「大ピンチだったけどシャウトモンがオメガシャウトモンに進化したお陰で勝てたぞ。」

タイキ「けど行けたのは俺だけだった。」

まる「大丈夫だったの?」

タイキ「とは言い切れなかったけどな。」

ネネ「でも私はタイキ君が戻ってきた時は凄く喜んだわ。」

キリハ「思わずタイキに抱きついたものな。」

ネネ「ちよつと、キリハ君!?! / / /」

キリハの暴露にネネは顔を赤くする。

まる「でもその気持ち分かるわ。私もダンにまた会えた時は嬉しかったし。」

タギル「皆さんこういう湿っぽい話は終わりにして次行きましようよ、次!」

ユウ「全くタギルつたら。」

タギルの一言で再び街の観光を楽しむ一同だった。

ネネの告白！ 結ばれた想い

ブラスターフォームの活躍を聞いた一同は次の場所に到着した。そこは大きな橋が見える所だった。

タイキ「着いた。」

ダン「ここは？」

シャウトモン『俺達の最大の敵、バグラモンとの最終決戦の場所だ。』

まる「この場所です？」

キリハ「ああ。」

アカリ「バグラ軍との最後の戦いが行われた場所。」

ユウ「ここで全部話します。」

タギル「さ、早く早く！」

一同は腰を掛けられる所で一休みする。

ダン「それで、タイキだけデジタルワールドに戻れたって言ってたけど、デジタルワールドはどうなっていたんだ？」

タイキ「バグラモンがコードクラウンを手に入れて、七つの国に分けられてしまって

いたんだ。」

キリハ「それぞれの国は量産型のダークネスローダーを持ったデスジエネラルが支配していた。」

まる「デスジエネラル？」

ネネ「バグラ軍のデジモン達で構成された7人の将軍です。」

タイキ「最初の国がドラゴンランド。」

キリハ「俺はデスジエネラルの1人のドルビツクモンに何度も挑んだが、ダークネスローダーを手にした奴に圧倒され戦意を失う寸前だった。」

ダン「そこにタイキが戻って来たということか。」

ネネ「ええ。」

回想

デジタルワールドに戻り、ドラゴンランドに辿り着いたタイキは早速キリハと合流した。

ドラゴンランドのデスジエネラル・火烈のドルビツクモンとの戦いに巻き込まれなが

らもドラコモンが地下に掘った逃走用の抜け道に逃げられたが、ドルビツクモンの配下のデジモン達にマグマを抜け道に流し込まれてピンチに陥る。

その時シャウトモンが再びオメガシャウトモンに超進化し、危機を脱する。だがここにドルビツクモンが再び現れオメガシャウトモンを圧倒した。

タイキ「シャウトモン！」

シャウトモン「くっそー。」

ドルビツクモン「さあ、どうする？」

タイキ「こうなったら仕方ない！」

タイキはファイズになって応戦しようとしたがオハナモンというデジモンに変装したネネに救出され危機を脱した。

タイキ「助かったよネネ。」

ネネ「きつとまた戻って来てくれるって信じてたわタイキ君。」

タイキ「・・・心配かけてすまなかった、っ！」

ネネ「大丈夫、タイキ君が無事でよかった。」

タイキは謝罪するが、ネネは涙目でタイキに抱きつき許した。タイキはそんなネネの頭を優しく撫でる。

暫くして落ち着き、ネネは離れ離れになったクロスハートのメンバーを探しながらド

ルビックモンを始めとしたドラゴンデジモンの弱点を探っていたことを伝えた。先程ネネはその弱点である竜哭の花の花粉でタイキ達を助けたのだ。直後ドルビックモンがドラゴンランド中にクロスハートを捕らえていることを知らせ、滝が多く流れる谷で処刑を明日に行うと宣言した。その夜、タイキ達は仲間達を助ける作戦会議を行い、準備に取り掛かった。

そして翌日、処刑が行われる谷にドルビックモンを始めとしたバグラ軍が配置していた。だがタイキ達はドラコモンの建造物の弱点を見破る能力を活かしてクロスハートの救出に成功した。直後ドルビックモンは配下のデジモン達と強制デジクロスしてタイキ達に襲い掛かるが、復活したキリハとメタルグレイモンが超進化したジークグレイモンによって倒された。

回想終了

タイキ「そして俺達は第二の国のヴァンパイアランドに着いて、月光のネオヴァンデモンを倒して……。」

ネネ「次の国のハニーランドで木精のザミエールモンを倒した後弟のユウと再会したわ。」

タイキ「その時のユウはダークナイトモンに騙されてデジタルワールドをゲームの世

界と思い込んでいたらしいんだ。」

ダン「デジタルワールドをゲームの世界と？」

ネネ「ユウは元々、臆病だけど、誰よりも命を大切にする優しい子だったの。」

ユウ「だから僕はデジタルワールドなら誰も死なないと思つて好戦的になつてしました。」

まる「そうだったのね。」

キリハ「俺自身も似た部分があつたから他人事とは思えなかつた部分もあつた。」

タギル「今の感じを見るとそんなことがあつたとは思えないな。」

ネネ「だから私はユウを捕まえて本当のことを教えて元の世界に戻ろうつて決心したの。」

アカリ「私にも弟がいるからネネの気持ちは分かるわ。」

ダン「ところで、ネネはいつタイキに告白したんだ？」

ネネ「ええつと、その／＼／」

タイキ「なんて言うか、勢いがあつて／＼／」

ゼンジロウ「俺が人間界で待っている間に――！ 悔しい――！」

アカリ「やかましい！（怒）」

ゴチン！

ゼンジロウ「アイタ！」

キリハ「確か、第四の国、サイバーランドのデスジエネラル、水虎のスプラッシュモンを倒して、次の国のゴールドランドでの戦いの時だったな。」

回想

ゴールドランドに到着したタイキ達はそのデスジエネラル・金賊のオレーグモンに仲間のデジモン達を殆ど洗脳され、撤退を余儀なくされる。その際スパロウモンは本音かどうかは分からないが、ネネの髪型を酷く言われショックを受けていた。

「逃げ切れたタイキ達は何処かの島でオレーグモンに対する作戦会議を行った。ネネはまだ落ち込んでいた。作戦会議がひと段落した後、タイキは1人外に出る。ネネ

タイキ「さて、俺もやることやらないとな。」

タイキはポケットから球体のようなもの取り出しスイッチを入れ投げる。すると球体は訓練所を思わせる空間を作り上げた。

タイキ「人間界から持ってきたフィールドボール、これを使えばここでの1秒が外では少ししか経っていない空間を作る。鍛えるには持つて来いだ。」

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン 『Standing by!』

タイキ 「戦いも段々激しくなっている。それに備えておかないとな。変身!」

『Complete!』

タイキはファイズに変身し、訓練を始める。ある程度終わるとファイズブラスターを取り出す。

ファイズ 「次はブラスターフォームだ。」

ファイズは変身コードを入力してファイズフォンをセットする。

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズブラスター 『Standing by! Awakening!』

ブラスターフォームになり訓練を再開する。

『1・0・3』

『ENTER』

ファイズブラスター 『Blaster Mode!』

ファイズブラスターにコードを入力してフォトンバスターモードに変形させる。

『ENTER』

ファイズブラスター『Exceed Charge!』

ファイズ「ハアアアアアアアアアア……ハア！」

ドーン！

ファイズブラスターから強力なフォトンブラッドの光弾を発射するフォトンバスターで的に命中させる。

ファイズ「ふう、今日はここまでかな。」

変身を解き、フィールドボールも元に戻す。

タイキ「そろそろ戻るか。」

ネネ「タイキ君。」

タイキ「！　ネネ。」

いつの間にか背後にネネがいた。

ネネ「ごめん、さっきの見た。」

タイキ「……そっか。」

ネネ「ねえタイキ君。」

タイキ「ん?」

ネネ「どうしてタイキ君はファイズになったの?」

タイキ「・・・そうだな。あれはもう1年くらい前のことだ。」

タイキはファイズになった切っ掛けを次々と話した。(第2話参照)

タイキ「そして俺はいつか来る戦いに備えて鍛えていたんだ。」

ネネ「そう。」

タイキ「さ、今日はもう休もう。」

ネネ「・・・タイキ君!」

タイキ「ん?・・・っ!」

タイキが作戦会議を行っていた洞窟に戻ろうとしたら、ネネに呼ばれ振り返ると抱き

つかれ仰天した。

タイキ「ネネ?・・・っ!」

戸惑っていると突然ネネに唇を奪われた。

ネネ「タイキ君、私貴方のことが好きなの。」

タイキ「え? それって友達としてじゃなくて・・・。」

ネネ「1人の男の子として。」

ネネの突然の告白にタイキは。

タイキ「ありがとう、ネネ／＼」

ネネ「それじゃあ・・・！」

タイキ「不束者だけど、よろしく頼むよ／＼」

ネネ「タイキ君！」

ネネは嬉しきでタイキの胸に顔を埋め、タイキもネネを抱き返す。そんな様子をキリハも見ていた。

キリハ「こんな所で告白とは、先が思いやられる。」

そして多少のトラブルがあったが仲間達の洗脳を解き、オレーグモンを倒して次の国に向かった。

回想終了

ダン「勢いで告白されたのか。」

タイキ「俺もあの時されるとは思わなかった。ファーストキスも貰ってしまったし／

／

まる「それにしてもスパロウモン、操られたとはいえ女の子の髪型をそんな風に言うなんて失礼じゃない。」

アカリ「ホントね。」

まるとアカリはジト目でスパロウモンをクロスローダー越しで見る。

スパロウモン『す、すみません（汗）』

本性かどうか分からないがスパロウモン、御愁傷様である。

新たなライダー！カイザとデルタ！

デジタルワールドでネネがタイキに告白した話をした時、オレーグモンに操られたスパロウモンが当時のネネの髪型の悪口を言ったことでまゐ達に冷たい視線で見られるのだった。

ダン「オレーグモンを倒した後タイキとネネが付き合い始めたって聞いた時は驚いたんじゃないか？」

ドルルモン『ああ。』

シャウトモン『まさか俺達がオレーグモンに操られている間にそんなことになっていたとはな。』

スパロウモン『僕もびつくりしたよ。』

メルヴァモン『ま、私もベルゼブモンがいるから分かるがな。』

ベルゼブモン『俺を巻き込むな！／／／』

まゐ「それより続き、続き。」

ネネ「そうだった。」

タイキ「俺達は次の国でキャニオンランドのデスジェネラル、土神のグラビモンとの

戦いでキリハが何故強さに拘っていたか知ったんだ。」

キリハ「俺は親父に厳しく育てられていたからな。『弱い奴には何の価値もない』と言われた言葉の意味をデッカードラモンの犠牲のお陰でやっと強さの本当の意味を理解した。」

ネネ「それからキリハ君、凄く変わったわねタイキ君。」

タイキ「ああ。」

キリハ「う、五月蠅い!／＼／＼」

一同「ハハハハハ!」

キリハ「笑うな!／＼／＼」

キリハが揶揄われたことで緊張が少しほぐれる。

タイキ「それを機にシャウトモン×7が誕生した。」

ダン「×7ってことは7体のデジモンでデジクロスした姿か。」

ネネ「ええ。オメガシャウトモン、ジークグレイモン、バリスタモン、ドルルモン、ス

ターモンズ、スパロウモンで。」

まる「あれ、6体?」

キリハ「そう思うのも無理はない。ジークグレイモンはグレイモンとマイルバードラモンがデジクロスしたメタルグレイモンが超進化したから2体分として数えられる。」

ダン「そういうことか。」

タギル「分かりにくいっスよね。」

タイキ「なんとかグラビモンを倒した俺達は最後の国、ブライトランドに到着した。」
キリハ「そのデスジエネラルのアポロモンは最初は信用できなかったがバグラモンに反旗を翻そうとしていたらしい。」

まゐ「え？」

ダン「どういうことだ？」

ネネ「アポロモンは住民を罰するたびにその償いとして自分自身を傷つけて右腕が動かずにいたの。」

シャウトモン『んで、自分以外のデスジエネラルを倒して自分の所に辿り着ける戦士を待っていたそうだ。』

ダン「本当はいい奴だったんだな。」

ユウ「はい。だからバグラモンとダークナイトモンはアポロモンの裏切りを恐れ密かにアポロモンのもう一つの人格のウイスパードをプログラムしていたんです。」

まゐ「全てお見通しだったのね。」

タイキ「ユウの乱入でウイスパードに体に乗っ取られたアポロモンを倒すのに俺は思わず躊躇ってしまった。あの時の自分が本当に情けないよ。」

アカリ「タイキ。」

キリハ「ま、俺なりに励ましてやったがな。」

タイキ「本当に済まない、俺の所為で・・・。」

ネネ「タイキ君、もう自分を責めなくていいわ。」

タイキ「ネネ。」

ネネ「誰にだってそういうことあるから。」

ネネは優しくタイキの手を握った。

シャウトモン『そのこともあつて俺達はブライトランドの地下のヘルズフィールドに落とされちまった。』

ベルゼブモン『そこは正に地獄と呼ぶべき場所だった。』

ユウ「その戦いで僕はデジモンも生きていて現実だつてタイキさんに思い知らされました。」

まゐ「やっと気づけたのね。」

タイキ「そしてユウは自棄になつて、ツワーモンをヘルズフィールドのデジモンを強制デジクロス、その地獄の力も吸収させてデッドリーツワーモンヘルモードにした。」

ダン「無理もないな、今まで信じていたものが全て偽りだつたって言われたら。」

ネネ「×7でなんとか倒して後はどうやって脱出するか模索していたけどウィスパ―

ドガリリスモンとブラストモンをデジクロスさせてヘルズフィールドを消滅させようとしていたの。私達やユウを巻き込んで。」

ダン「ピンチじゃないか!？」

タイキ「その時同時にワイズモンが何とか俺とユウが倒れないと出られないというのをどうすればいいのか分析してくれていた。」

キリハ「間一髪で脱出できたがな。」

ゼンジロウ「ヤバいじゃん。」

ネネ「リリスモンも暴走した状態のままだったけど・・・。」

タイキ「ベルゼブモンが自らを犠牲にしなかったら危ないところだった。」

シャウトモン『タイキもかなりシヨックだったぞ。』

メルヴァモン『全く、こっちの身にもなれ。』

ベルゼブモン『すまない。』

ネネ「復活したらメルヴァモンが泣いて喜んでいたもんね。」

タイキ「ああ。」

タイキとネネはそんなベルゼブモンとメルヴァモンを微笑ましい視線を向けた。

キリハ「ヘルズフィールドから脱出した俺達はもう一度ウイスパードになったアポロモンと戦った。」

ドルルモン『奴はタイキを動揺させようとアポロモンの姿になったが、タイキは覚悟を決めてウイスパードごとアポロモンを倒すと決意した。』

ダン「吹っ切れたんだな。」

タイキ「そして本当のアポロモンの人格も手を貸してくれたお陰で倒すことができた。」

ネネ「全てのデスジエネラルを倒したことでバグラモンがいる所に辿り着けたわ。」

タイキ「だけどダークナイトモンがコードクラウンにデジモン達から集めた負のエネルギーを注ぎ込んだダークストーンで今まで倒したデスジエネラルを復活させたんだ。」

キリハ「だがそいつらは心が抜き取られていた。」

まゐ「心が?」

タイキ「ダークナイトモンはデスジエネラル達を体だけ復活させて自分の操り人形にした。」

ダン「自分の部下でさえ信用していなかったのか。」

キリハ「×7で対抗したが、デスジエネラルをデジクロスさせたグランドジエネラモンに圧倒させられた。」

ネネ「×7のデジクロスが解けたらシャウトモン、バリスタモン、ドルルモンがダー

クストーンで心を奪われて体が抜け殻にされてしまったの。」

まる「シャウトモン達が!？」

タイキ「俺はシャウトモン達の心を取り戻すためにダークナイトモンに態と心を奪われ、心の牢獄とも言われているプリズンランドに向かった。」

ダン「お前も無茶するな。」

キリハ「俺達もタイキが戻るまで待つていたが突然俺とネネが光に包まれて気が付いたらあの拠点にいた。」

ネネ「私達はそこで草加雅人さんと三原修二さんと出会ったわ。」

回想

タイキがシャウトモン達の心を取り戻すのを待つていたキリハとネネとデジモン達だったが、

キリハ「な、なんだ!？」

ネネ「キヤーッ!」

メタルグレイモン「キリハ!」

スパロウモン「ネネー!」

キリハとネネは突然光に包まれるのだった。やがて光が晴れると2人の目の前にある建物が現れる。

キリハ「どこだここ?」

ネネ「見たところ人間界のようだけど・・・。」

???「よく来たな。」

???「待っていたぞ。」

キリハ・ネネ「!?!」

2人の前に見たことない2人の男が現れた。

ネネ「貴方達は?」

雅人「俺は草加雅人。」

修二「俺は三原修二だ。」

ネネ「え!?!それって前にタイキ君が言っていた乾巧さんの!?!」

雅人「彼から俺達のこととは聞いていたか。」

修二「そう、乾と共に戦った仲間だ。」

キリハ「・・・それでここはどこなんだ?人間界みたいだが。」

雅人「ここは人間界にある仮面ライダーの拠点だ。」

修二「工藤タイキ君が乾からファイズの力を受け取った後で使われている。」

ネネ「ここが!？」

雅人「案内しよう。」

キリハ「悪いがこっちは時間が・・・。」

修二「心配はいらない。今は俺達以外時間が動いていなくて、デジタルワールドでもそんなに経っていない。」

ネネ「そうですか。」

キリハとネネは建物内に入り、タイキがどんな訓練をしてきたか実感した。

キリハ「タイキの奴、こんな所で1人で。」

ネネ「それにしても乾さんがオルフェノクっていう怪人だったなんて。」

雅人「確かにあいつはオルフェノクだが、人間としての心を持っていた。」

修二「そして自分の力を受け継げる人間が現れた。」

キリハ「それがタイキだった。」

雅人「そうだ。」

修二「そして君達がカイザとデルタに選ばれた。」

ネネ「私達が、ですか?」

雅人と修二が肯定するように頷く。そして2つのアタッシユケースを取り出し蓋を

開ける。

雅人「俺達が使っていたカイザギアと……。」

修二「デルタギアだ。」

キリハ「これが。」

雅人「ファイズギアのように調整されたこれを使えば確かに戦えるようになるが、後戻り出来なくなる。」

修二「どうする?」

ネネ「私は……。」

ネネは仮面ライダーになって戦うことに迷う。確かにこれを使えばタイキが1人で戦わずに済む。しかし、同時にタイキの様に命懸けの道を辿ることもなる。そんな沈黙をキリハが破る。

キリハ「俺はやるぞ。」

ネネ「キリハ君!」

キリハ「タイキは覚悟を決めて仮面ライダーになったが、あいつ1人だけでは戦い抜くのは難しすぎる。人数は多いに越したことはないだろう。」

雅人「ならこれを渡そう。」

キリハは雅人からカイザギアを受け取る。そんなキリハを見てネネも意を決した。

ネネ「私もやります。タイキ君を互いに支えられるように！」

修二「答えが出たようだな。」

ネネも修二からデルタギアを受け取る。

雅人「これで俺達の役目は終わりだ。」

修二「後は任せた。」

雅人と修二は役目を終えたかのように眩くと最初のように光り輝く。そしてキリハとネネは元の場所に戻った。デジモン達にどこに行っていたか問い質されていたが暫くしてタイキがシャウトモン×3とオレーグモンと共に戻ってきた。直後にアポロモンも消滅してしまった。タイキは悲しみに耐えながらもファイズドライバーを装着する。

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズフォン『Standing by!』

タイキ「変身！」

『Complete!』

タイキがファイズに変身したと同時にキリハとネネが並ぶ。

キリハ「タイキ。」

ファイズ 「ん?」

キリハ 「前に言ってたよな、戦うことが罪なら自分が全て背負うと。」

ファイズ 「ああ。」

キリハ 「お前には荷が重すぎる。」

ファイズ 「え?」

キリハ 「だから俺達も背負ってやるよ!」

ネネ 「もうタイキ君だけに辛い戦いはさせない!」

キリハとネネが先程受け取ったベルトを装着する。

ファイズ 「え、まさか!」

キリハ 「ああ。」

ネネ 「私達も仮面ライダーとして戦う!それに・・・。」

ファイズ 「ん?」

ネネ 「好きなタイキ君を守りたいから／＼／」

ファイズ 「ネネ／＼／」

キリハ 「そういうのはこの戦いが終わってからにしろ。」

ネネ 「そうだったわね。」

『ENTER』

カイザフォン『Standing by!』

ネネ「変身!」

デルタフォン『Standing by!』

『Complete!』

キリハ「変身!」

『Complete!』

それぞれカイザとデルタに変身した。

ファイズ「よし、反撃開始だ!」

ダークナイトモン「ふ、面白い。」

再びシャウトモン×7となってオレーグモンとアポロモンを失ったランドジエネラモンと交戦し、仮面ライダー達も応戦する。

その際ダークナイトモンが作ったデスジエネラルを蘇らせたリヴァイブサーキットをオレーグモンが傷を負いながらも破壊した。ランドジエネラモンもプリズンランドでダークナイトモンに利用されたデスジエネラル達が苦しみ出したことで弱体化し、×7のセブンビクトライズが直撃した。

ファイズ「キリハ!ネネ!」

回想終了

ダン「大変だったんだな。」

まる「私達と同じくらい辛かったでしょうね。」

タイキ「だから俺達はオレーグモンとアポロモンの思いを無駄にしないために最後の戦いに臨んだんだ。」

ネネ「ええ。」

キリハ「その時の俺達のライダーとして実力は浅かったが、実戦で経験を積みながら強くなった。」

タイキ「そして俺達はバグラモンがいる本拠地にたどり着いた。」

ダン「遂に最終決戦か。」

デジタルワールドの戦いはいよいよクライマックスである。

未来を掴め!最終決戦!!

今日1日でファイズとダークナイトモンの対決、ネネの仲間入り、タイキのデジタルワールドへの帰還、グランドジェネラモンとの対決、キリハとネネの仮面ライダーになる決意など驚くことが多くあった。

タイキ「グランドジェネラモンに勝って、俺達はバグラ軍の本拠地に漸く辿り着いた。」

キリハ「無論、向こうも黙ってはいなかったがな。」

ダン「ユウは?」

ネネ「バグラ大魔殿で捕らえられていたわ。」

まる「もう用済みだったのね。」

タイキ「バグラ軍配下のデジモン達をどんどん倒して遂にバグラモンがダークナイトモンと現れた。そしてダークナイトモンはバグラモンの弟だということも分かった。」

ダン「ダークナイトモンがバグラモンと兄弟!」

まる「何でバグラ軍といたり、デスジェネラルがダークネスローダーを持っているのか疑問だったけどそういうことだったのね。」

キリハ「バグラモンがコードクラウンを集めていたのはD5を実行するためだったらしい。」

ダン「デーファイブ？」

タイキ「DIMENSION DELETE DEADLY DESTRUCTION
DAYの5つのDを合わせた名称で・・・。」

ネネ「コードクラウンのデジタルワールドを作り変える力で人間界とデジタルワールドを融合させて新しい世界を作り出すっていうバグラモンが立てた計画なの。」

ダン「コードクラウンにそんな力が。」

まゐ「12宮Xレアと同じくらいね。」

アカリ「バグラモンがその計画を実行した時人間界にそいつの右腕が現れたんです。」
ゼンジロウ「巻き込まれそうになった時デジタルワールド分裂の際デジメモリになって次元の狭間にいたエグザモンとウォーグレイモンが助けてくれたお陰でデータにされずに済んだよ。」
ダン「そうか。」

回想

バグラ軍の本拠地であるバグラ大魔殿に辿り着いたクロスハートとブルーフレア。シャウトモン×7で応戦するがバグラモンの強大な力に圧倒されデジクロスを解除される。

その際タイキはメルヴァモン、ワイズモン、ナイトモンズと共に地下に落とされユウが捕らえられている所に向かった。

その一方、キリハとネネはバグラモンと交戦していた。バグラモンはタクティモンが遺した「蛇鉄封神丸」のお陰で右腕を人間界に出現させD5を実行している途中でもあった。クロスハートとブルーフレアが力を合わせて攻撃するも決定打にならず、バグラモンの体も直ぐに再生してしまった。

暫く攻撃を続けていたが、なんとダークナイトモンがツインスピアをバグラモンに突き刺しダークネスローダーで吸収したのだ。

ダン（ちよ、ちよっと待てよ! どういうことなんだ!?)

まゐ（どうしてダークナイトモンがバグラモンを!?)

キリハ（実はダークナイトモンはバグラモンにコンプレックスを抱いていたようなんだ。）

ネネ（バグラモンを越えるためにデジクロスの力に目を付けてユウまでも利用してい

たんです。）

シャウトモンへ実際戦ったらバグラモンより弱かったけどな。）

バグラモンを吸収したダークナイトモンはキリハとネネ、クロスハートとブルーフレアのメンバーを襲い優勢に立つ。追い詰められた彼らはダークナイトモンにクロスローダーに入っているデジモン達をダークネスローダーで更に吸収しようとした。キリハとネネはそれを阻止しよう必死に抑えていた。

その頃タイキはユウを見つけ救出しようとするがヘルズフィールドでの戦いで致命傷を負い、消滅してしまったダメモンの相棒・チューチューモンが立ち塞がった。タイキはワイズモンのアドバイスを受け、クロスローダーからバステモンをリロードする。チューチューモンを見たバステモンは豹変してチューチューモンを捕食してしまった。それを見たタイキ達は流石にドン引きしてしまった。

ユウを無事救出したタイキはバグラ大魔殿を破壊し仲間達と合流した。ダークナイトモンはダークネスローダーを捨て再びグレートクロスしたシャウトモン×7と交戦する。だがシャウトモンにバグラモンより弱いと指摘された時ダークナイトモンはバグラモンに呑み込まれダークネスバグラモンとなってしまうた。

ダン（ダークナイトモンが逆に乗っ取られてしまったのか。）

まる（バグラモンも見抜いていたのね。）

ダークネスバグラモンになったことで状況が更に不利になりシャウトモン×7も敗れた。グレートクロスが解除されてもシャウトモンはダークストーンを取り出そうと突っ込むが返り討ちにされ消滅してしまった。

タイキ達もダークネスバグラモンに不要とされデータにされそうになるもアカリとゼンジロウによって助け出された。そしてタイキ達は結界に包まれて人間界の宇宙に戻ってきた。

だがユウは今まで自分が犯した罪を悔いて戦意喪失していたが、タイキにダメモンが復活する可能性があることを教えられ、今までの罪滅ぼしのためにデジタルワールドと人間界を守るために戦う事を決意した時ダークナイトモンが捨てたダークネスローダーが黄色のクロスローダーに変化したのだった。

ユウ「ありがとうございます、タイキさん。」

タイキ「やっと元気になったな。」

ネネ「タイキ君!」

タイキ「うわっ!?!」

突然ネネがタイキに抱き付き嬉し涙を流しながら感謝を述べた。

ネネ「ありがとう、ユウの心を救ってくれて。」

タイキ「俺にできることをしたまでさ。」

タイキは優しくネネの髪を撫でる。

ユウ「そういえば姉さん、デジタルワールドでタイキさんに告白したんだっけ。」
キリハ「ああ、タイキもそれに答えて付き合い始めたそうだ。」

ゼンジロウ「なにー!?」

アカリ「・・・そっか、おめでどうタイキ。」

アカリは寂しい気持ちになりながらも2人にエールを送った。

地上に降り立ったタイキ達はダークネスバグラモンと再び交戦をする。

タイキ「キリハ、ネネ！」

キリハ・ネネ「ああ！（えええ！）」

『5・5・5』

『ENTER』

『9・1・3』

『ENTER』

『Standing by!』

タイキ・キリハ・ネネ「変身！」

『Complete!』

それぞれファイズ、カイザ、デルタに変身した。

アカリ「え、ネネ達も!?!」

デルタ「ええ、デジタルワールドに行ってる間にね。」

ファイズ「いくぞ!」

クロスハートとブルーフレアはダークネスバグラモンの軍勢とぶつかり合う。その間にファイズはシャウトモンを救うため、デジメモリのデジモン達とパチンコになったスターモンズにバグラモンのダークストーンまで飛ばしてもらおう準備をしていた。

ファイズ「よし!」

デルタ「タイキ君。」

ファイズ「ん?」

デルタ「気を付けてね。」

ファイズ「・・・ああ。」

デルタにエールをもらい飛び出そうとするがアカリが強引に同行する。ダークストーンの中に入ったファイズ達はバグラモンに遭遇する。応戦するが全く歯が立たなかった。

バグラモン「まだやるか?」

ファイズ「俺は絶対に諦めない!」

『5・5・5』

『ENTER』

ファイズブラスター『Standing by! Awakenng!』

ブラスターフォームになるもバグラモンは圧倒的な力でファイズをねじ伏せる。ファイズはバグラモンに捕らえられて握りつぶされそうになるがコードクラウンがファイズの想いに答え、復活したシャウトモンとベルゼブモンに助けらる。更にタイキの望む通りに良きデジモン達が次々と復活を果たす。外で戦っている仲間達の元にもデッカードラモン、オレーグモン、アポロモンとグレイドモンの姿もあった。彼らも加わり形勢が逆転した。

ファイズ達は直ぐにダークネスバグラモンから脱出し、仲間達と合流した。そしてコードクラウンがファイズ達に教えてくれたファイナルクロスでシャウトモンはシャウトモン×7スペリアルモードとなりダークネスバグラモンを遂に倒したのだった。

タイキ「終わったな。」

キリハ「ああ。」

ネネ「タイキ君。」

タイキ「ん?」

ネネ「大活躍だったわね。」

タイキ「俺だけじゃないさ。皆で力を合わせて掴み取った勝利さ。」

ネネ「それでも一番頑張ったのはタイキ君よ。」

チユツ

するとネネはタイキに近づき、彼の頬にキスをしたのだ。タイキは自分の頬に手を当てる。

タイキ「ねっ、ネネ!？」

ネネ「一番頑張ったタイキ君へのご褒美よ♪」

ネネはウインクしてタイキと手を繋いだ。タイキも繋がれた手をそつと握り返し目の前の光景を眺める。そしてデジモン達はデジタルワールド再建のためタイキ達と別れるのだった。

回想終了

タイキ「それから2年が経ってデジクオーツっていう空間ができてデジモン達が人間の悪い心に影響されて、負の感情を爆発させたような行動を取る事件が起きたんだ。」

タギル「それを防ぐために新しくクロスローダーを手に入れた俺達が暴れているデジモンを捕獲ことになったんす。」

ダン「そうか。」

まる「折角平和になったのに。」

ユウ「でも僕もそのことがあってダメモンともう一度出会うことができました。」

キリハ「デジクオーツの黒幕であるクオーツモンも倒されて、デジモン達もデジタルワールドに帰されたがまだ残っていた。」

ダン「初めてタイキ達と会った時のデジモンはその1体か。」

アカリ「あれからもう3年は経ったわ。」

まる「3年間も。」

ゼンジロウ「けど殆どハントしたのか、最近はデジモンが現れなくなったんだ。」

ダン「そうか。」

そして現在日が沈みかけ、夕暮れとなっていた。

ダン「今日はありがとな、色々話してくれて。」

まる「タイキ君達の恋愛話も聞いて楽しかったわ。」

タイキ「えっと、その・・・／＼／」

ネネ「／／／モジモジ

ダン「準備が出来次第出発するけどどうする?」

キリハ「なら3日後にしよう。流石に明日は無理だ。」

まゐ「分かったわ。」

こうして一先ずタイキ達の武勇伝は終わりを迎えた。だが仮面ライダーとしての戦いはまだこれからだ。

束の間のシヨツピング！　小さな女子会！！

タイキ達の武勇伝が終わってその翌日、一同は出発の準備のために街に買い物に来ていた。

ダン「先ずは何が要るかな？」

タイキ「着替え用の服とか色々だな。」

キリハ「手当て用の薬も要るな。」

男性陣は必要最低限のものを集めていた。

まる「ねえ、これいいんじゃない？」

アカリ「わあ、可愛い！」

ネネ「これもいいわね！」

一方の女性陣はアクセサリー等を見て楽しんでいた。

ユウ「姉さん達楽しそう。」

ゼンジロウ「つていうか何で俺が荷物持ちなんだ!？」

タギル「まあまあ。」

ゼンジロウ、タギルとユウは現在荷物持ちをしている。

タイキ「女の子ってホントショッピングが好きだな。」

キリハ「ああ。絶対長くなるぞ。」

ワイズモン『データによると、9割の女性がショッピングが好き、或いは嫌いではないらしい。』

タイキ「そ、そんなにいるんだ。(´・`・;)」

少し疲れたタイキと呆れたキリハ。ワイズモンのデータを聞いて更に疲れたようだ。そこにダンがフォローを入れる。

ダン「まあいいんじゃないか、偶にはこういうのも。まる達も楽しそうだし。」

タイキ「・・・そうだな。」

――――
暫く買い物していた男性陣は外で女性陣を待っていた。

ユウ「姉さん達遅いですね。」

タイキ「まあゆつくり待とうじゃないか。」

キリハ「俺は早く帰りたいがな。」

ダン「あはは(？▽？;)」

更に待つこと数分、女性陣が買い物袋を提げて店から出てきた。3人は満足そうな表情をしていた。

まゐ「お待たせ〜！」

タギル「終わったみたいですね。」

ゼンジロウ「疲れた。」

アカリ「いっぱい買い物できちゃった♪」

ネネ「ええ♪」

タイキ「それじゃあ帰るか。」

タイキの一声で男性陣が帰り支度を始めると、まゐが待ったをかける。

まゐ「ちよつと待って。」

男性陣「ん？」

アカリ「私達ちよつと向こうのカフェでゆっくりしてくるわ。」

ネネ「だからタイキ君達は少し待ってて。」

タイキ「分かった。」

女性陣を待っている間、男性陣は近くのテーブルでバトスピをしていた。

ダン「サジット・アポドラゴンXでアタック！」

タイキ「くっ、ライフで受ける。俺の負けだ。」

タギル「スゲー、キリハさんやユウに続いてタイキさんに勝って3連勝した!」

キリハ「俺も久しぶりにやったがここまで強いとは思わなかった。」

ユウ「カードそれぞれの効果を使ってピンチを切り抜けて逆転したり、12宮Xレアを使いこなしていました。」

ゼンジロウ「勝負運が強いなあ。」

ダン「戦いながらデツキを強化してきたからな。」

タイキ「機会があつたらまたバトルしてほしいな。」

ダン「いいぜ。タイキも強かったぞ。」

タイキ「ああ。」

ダン「ところで、バグラモンとの戦いが終わった後どうしてたんだ?」

タイキ「俺はあの建物でファイズとして訓練しながらいつも通りの生活をして中学に進級したよ。」

ユウ「僕もタイキさんと同じ中学に入学しました。」

キリハ「俺はアメリカにいた。」

ゼンジロウ「俺とアカリは別の中学に入学した。」

タイキ「ネネは香港でアイドル活動を始めた。それを聞いた時は驚いたけど。」

ダン「そうか。」

タイキ「ネネは父親の反対を押しつけてアイドルになったそうなんだ。でも俺はそんなネネが決めたことを応援した。」

回想

タイキ「え、香港でアイドルをやる!?!」

ネネ「ええ。パパから反対はあったけど、私も自分の可能性を試してみたいの。」

タイキ「・・・そうか、分かった。俺応援するよ。」

ネネ「タイキ君、ありがとう!」

ネネがタイキに向けて満面の笑みを向けるとタイキは頬をポリポリしながら照れていた。

ネネが香港に旅立つ当日

ネネ「じゃあ行ってくるわ。」

タイキ「ああ、気を付けてな。」

アカリ「偶には連絡してね。」

ゼンジロウ「俺も応援してます!」

ユウ「頑張ってください姉さん。」

ネネ「うん。」

ネネは急に顔を俯かせて声のトーンが低くなる。

タイキ「どうした?」

ネネ「決心したんだけど、暫くタイキ君達に会えなくなるって思うと少し寂しくて。」

タイキ「……。」

するとタイキはネネ抱きしめた。

ネネ「タイキ君? // //」

タイキ「別にもう会えないってわけじゃない。例え離れ離れでも俺達の心はずっと一緒だ。」

ネネ「……うん // //」

ネネもタイキを抱き返して元気になるのだった。そしてネネは笑顔で香港に旅立った。

回想終了

とあるカフエ

まゐ「へえ、そんなことがあつたんだ。」

ネネ「あの時タイキ君にいっぱい元氣もらっちゃつたんです／＼」

アカリ「私もまさかタイキがあんな大胆なことするなんて思わなかつたわ。」

まゐ「それだけネネのことを大切に思つていたのね。」

ネネ「私も嬉しかつたです。ちよつと恥ずかしかつたけど／＼」

まゐ「私も最初はダンのこと暑苦しくてお節介と思つていたけど、一緒にいるうちに好きになつていたわ。」

アカリ「そうなんですか。」

まゐ「連絡はしあつてたの？」

ネネ「はい、タイキ君と何度か。だから香港でタイキ君に電話じやなくて直接会えた時はとても嬉しかつたです。」

回想

デジクオーツ事件が発生して数日が過ぎ、タイキ、ユウ、タギルはトレインモンに香

港まで連れて来てもらいネネと出会った。この時ネネは大人気アイドルとなっていた。そして同時にハーピモンというデジモンがネネの父の娘を思う気持ちに漬り込んでネネに近づく者を排除しようとする怪現象が起こっていた。それを無事解決してネネは遂に父と和解できたのだ。

その夜のイベント後

ネネの父「今回は君達にも迷惑をかけたね。本当にすまない。」

タイキ「いえ、気にしないでください。貴方のネネを思う気持ちは理解しましたし。」

ネネ「そうよパパ。もうこの話は終わりにしましょ。」

ネネの父「・・・分かった。」

タイキ「良かったなネネ。」

ネネ「うん。」

ネネの父はそんな娘とタイキの様子を見て確信した。

ネネの父「そうか、ネネが家で妙に明るさが増したと思っていたが君か。」

タイキ「え?」

ユウ「そうだよパパ。姉さんはタイキさんと会ってから笑顔が増えたんだ。」

ネネ「まあ、合ってるは合ってるけど／／／」

ネネの父「故に付き合っているのだろ、2人共。」

タイキ・ネネ 「「え!?!」」

突然の発言に2人は顔を赤らめる。

ガムドラモン 「なななな、なんだってえええ!!」

タギル 「そ、そんな・・・。」

タギルはシヨック状態だった。

ネネ 「ば、パパ、知ってたの!?!」

ネネの父 「ユウから少し聞いてな。それにお前が写真の彼の顔を見る度に嬉しそうな顔をしていたしな。」

ネネ 「み、見られてたんだ」

ネネの父 「タイキ君。」

タイキ 「は、はい!」

ネネの父 「娘のことをこれからも陰ながら支えてやってくれ。」

タイキ 「わ、分かりました」

何はともあれネネの父に認めてもらったタイキとネネである。一方のタギルはシヨックが大きかったのか口から魂のような物が出ていた。

それからしばらくして・・・

タイキ「まさかネネの父さんに認められるとは思わなかったな／／／」

ネネ「うん／／／」

ネネが泊まっているリビングでタイキとネネが顔を赤らめながら話し合っていた。因みにユウとタギルは先に眠りについていていた。

ネネ「ねえタイキ君／／／」

タイキ「ん？」

ネネ「明日時間、空いてる？／／／」

タイキ「ああ、明日は休みだし何も無いよ。」

ネネ「それじゃあ、私も明日休暇だしちよつと付き合ってくれない？／／／」

タイキ「え、それって……」

ネネ「デート／／／」

タイキ「わ、分かった。でも変装はしとくんだぞ／／／」

ネネ「分かってる／／／」

その翌日、2人は香港を観光がてら久しぶりの二人きりの時間を過ごした。そして時間が過ぎいよいよタイキ達が日本に帰る時がやって来た。

ネネ「ありがとうタイキ君、今日は楽しかったわ。」

タイキ「俺もだ。また連絡するな。」

ネネ「うん！」

ユウ「タギル、いい加減元気出せ。」

タギル「うるせえ。」

ダメモン「全くダメダメね。」

ガムドラモン「こりや時間かかるぞ。」

シャウトモン「まあ、知らなかったとはいえな。」

タギルはまだ立ち直ってはいなかった。

タイキ「じゃあ俺達行くよ。」

ネネ「うん。」

ネネは久しぶりにタイキと時間を過ごしたため別れが惜しく感じることはなかった。タイキがネネに背を向けると迎えに来たトレインモンに乘ろうとする。すると後ろから近づいてくる足音に気づき、タイキが振り返るとネネが小走りで近づきタイキに抱き付いたのだった。

タイキ「ね、ネネ？」

タイキも少し戸惑ったがネネを抱き返す姿勢になった。それを見ていたシャウトモン達は目を見開いて驚いた表情をしていた。暫く抱き付いたネネはタイキから身を離すといつも以上の笑顔でタイキに微笑む。

ネネ「また元気もらっちゃった。」

タイキ「ネネは笑顔が似合うよ。」

ネネ「ありがとう／＼／＼」 チュツ

タイキ「!!／＼／」

ネネは去り際にタイキの頬にキスを落としデジクオーツを去るのだった。タイキは頬に手を当ててネネの後ろ姿を見る。一瞬驚いたが小さい笑みを浮かべてタギル達と日本に帰還するのだった。

回想終了

ダン「そんなことが。」

ユウ「僕も姉さんがあんな大胆なことするなんて思いませんでした。」

タイキ「まあ、今となっては気恥ずかしいけど／＼／」

とあるカフエ

まる「でもばれたら大変じゃない?」

ネネ「今は大丈夫だけどアイドルを引退する時には発表しようって考えてます／＼

「まゐ「ふふ、将来タイキ君と一緒に暮らせるといいわね♪」

ネネ「はい／＼／＼」

それから色々楽しんだ後タイキ達は荷物をまとめて帰宅するのだった。

2日後いよいよ出発の時が来た。

タイキ「じゃあ皆、後は頼むぞ。」

ユウ「はい！」

ゼンジロウ「おうよ！」

タギル「任せてください！」

アカリ「ネネ、タイキをお願いね。」

ネネ「ええ。」

ダン「準備はいいか？」

タイキ「ああ。」

キリハ「いよいよだな。」

まゐ「じゃ、行きましょ！」

まゐがそう叫ぶと目の前にオーロラカーテンが出現する。それをダンとまゐがタイ

キ、キリハ、ネネと共に元の世界に戻るのだった。